
鋼鉄のストライカー

剣風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鋼鉄のストライカー

【Nコード】

N9987V

【作者名】

剣風

【あらすじ】

時空管理局に所属するベルカの騎士、ゼスト・グランガイツ。違法研究施設に乗り込んだ彼の前に立ち塞がった少年——ゼストの遺伝子から作り出された最初の戦闘機人、タイプ・ゼロ。戦いに存在意義を見出し、強さのみを信条とする少年は、やがてゼストに次ぐストライカーとして名を馳せる事となる……。

※デバイスの会話は、日本語に翻訳してあります。

01…ラファールと名付けよう

照明に照らされた明るい部屋。広さは二十メートル四方。天井までの高さは十メートル。

その部屋に、人間大ほどの球体が十個浮かんでいた。所々にレンズを埋め込み、そこから標的目掛けてビームを放つ。

降り注ぐ閃光の雨をかくぐるのは、十二歳の少年だった。濃紺のラバースーツで首から下を覆い、装甲で補強されたグローブとブーツをその上から身に付けている。ボサボサの髪をなびかせ、腹を空かせた野良犬のようなぎらついた眼で敵との位置関係を測り、獣じみた動きでビームをかわしていく。

かわしきれない攻撃は、手にした槍で払いのけた。

少年の年の割に大柄な体躯に合わせたその槍は、全体が金属製だ。穂先は緩やかな弧を描く漆黒の刃。峰から切っ先に向けて枝刃が伸び、刃根本からも二枚の枝刃が柄の方向に伸びている。揺らめく炎をそのまま凝固させたような、激しい形の槍であった。

少年は長柄の端を掴んで、迫り来る五条の閃光を一薙ぎで打ち払う。

直後、足下に魔法陣が浮かんだ。三角形の中心に剣が描かれた、古代ベルカの魔法陣だ。

その魔法陣が浮かんだかと思うと、少年の姿が消えた。

彼の正面にいた球体が、突然壁に叩きつけられる。衝撃でぺしゃんこになった機体に、槍が深々と突き刺さっており、その槍を少年がしっかりと握りしめていた。

身体能力や武器の強化を中心に、対人戦闘に特化したベルカ式魔法。

自身の肉体を高速移動させて一個の弾丸に変えた突撃だった。

戦いはまだ終わってない。残る敵は九体。

少年は歯を剥き出しにして、余裕すら感じさせる笑みを浮かべた。

しかし、戦いはそこで中断された。
球体の群れは下面から脚を出して、床に着陸する。

『タイプ・ゼロ』

壁に設置されたスピーカーから、少年に呼びかける声が響いた。

『侵入者だ。これよりそちらに誘導する。抹殺しろ』

「俺たちの晩飯はどうなるんだよ」

『侵入者を始末してから与えてやる』

「敵はどんな奴だ？ 強いんだろうなあ？」

『……………』

スピーカーの向こうで、一瞬の間が置かれた。

『敵は、お前のオリジナルだ』

その返答に、少年は歯を剥き出しにして笑った。



ゼスト・グランガイツは一人、施設の廊下を進んでいた。

ここは戦闘機人——機械を埋め込んで身体能力を飛躍的に高めた戦闘用サイボーグの研究施設だ。無論、頭に“違法”の字が付くタイプのものである。

情報によると、ここにはその戦闘機人の実験体が三人いる。内二人は既に部下たちが保護してある。二人とも、年端もゆかぬ少女だった。

ゼストはその哀れな少女たちの安全確保を部下たちに託し、残る一人を救うべく、单身施設の奥へと足を運んでいた。

巖を削って整えたような屈強な肉体を、騎士服と呼ばれる防護服の中に押し込んだ巨漢の騎士は、その体軀に見合った大槍を手に、照明が落とされ非常灯によってうつすらと赤く照らされた廊下を進む。

我が家の廊下を歩くような悠然とした足取りだが、彼の神経は自身の周囲を用心深く探り続けている。

真っ直ぐに伸びた廊下を進み、やがてドアの前にたどり着いた。そのドアが、ゼストを招き入れるように自動で開く。

——広い部屋の真ん中に、少年が立っていた。その少年が手にしているのは、槍。自分と全く同じ形の槍であった。

ゼストの背後で、ドアが閉まる。

しかし彼はそれには構わず、目の前の少年を見据えた。

「会いたかったぜ、オリジナル」

少年は右手でクルクルと槍を回転させながら、唇をニヤリと歪ませる。

「あんたをぶっ倒すのをずっと待ってたんだ」

「何故だ」

ゼストの声には、少なからず戸惑いがあった。

「この連中はしょっちゅう俺とあんたを比べやがる。それがムカつくんだよ」

クルクル回していた槍をピタリと止めて、少年はその切っ先をゼストに向ける。

「俺がどれだけ力を示しても、奴等にしてみりゃあ、あんたの遺伝子のおかげでしかないらしい。ふざけやがって……俺が強いのは俺が俺だからだ。ゼスト・グランガイツのコピーだからじゃねえ！」

今ここで初めて出会った筈の騎士と比較される屈辱を思い出したのか、少年は語気を荒げる。

（やはりこの少年は、俺の……）

そして彼の言葉は、ゼストが得ていた情報の裏付けにもなった。

この違法研究施設にいる三人の戦闘機人実験体は、時空管理局々員の遺伝子を元にして作られたクローン人間。

事実、既に保護した二人の少女は、ゼストの部下クイント・ナカジマに酷似していた。

そして最後の一人であるこの少年には、ゼストの遺伝子が使われている……。

「この連中がどんだけ間抜けでも、俺があんたをぶっ倒せばイヤでも思い知る……俺がこの世で一番強いんだってな！」

少年は地を蹴って、一気に距離を詰めた。

右手は槍の端を掴んでいる。

横殴りの一撃が、唸りを上げてゼストの巨体目掛けて繰り出された。

ゼストも槍を左手のみで掴み、鋼のごとき筋肉をしならせて振り抜いた。

二本の槍がぶつかり合い、けたたましい金属音が響く。

少年の一撃は容易く弾き返された。右手に、骨の髄にも届きそうな強い痺れが広がる。

直後、ゼストの胸部に衝撃が走る。少年の蹴りが突き刺さってい

た。

その蹴りの反動で、少年は距離を取る。

——チッ！

そんな舌打ちが聞こえた。相手が自分よりも体格で上回っている、それでも力負けした事が悔しいらしい。

槍を両手で握り直す少年の足下に、ベルカ式魔法陣が浮かんだ。ラバースーツに覆われた体軀から、炎のような光が立ち上る。

（肉体強化か……）

ゼストがそう認識した瞬間、少年は爆発的な瞬発力で至近距離に飛び込んでいた。

振り下ろされる、先程よりも強力な一撃。

ゼストは槍の柄で受け止める。

少年は更に一撃、二撃、三撃……息つく暇もない連打を繰り返す。嵐のような激しい攻撃。パワーもスピードも、魔法による強化を差し引いても年齢以上だ。しかし……、

「なっとらんな」

ゼストはその全てを、冷静に捌いていた。

パワーもスピードも申し分ない。しかし動きに無駄がありすぎる。予備動作も見え見えで、次にどの攻撃が来るか簡単に読める。この施設でこなしてきたであろう訓練で多少は形になっているが、彼の目から見ればまだまだ素人の範疇だ。

「そうかい！」

少年は大きく身を捻り、ゼストの足下目掛けて槍の穂先で斬りつける。

——が、それはフェイク。

槍は瞬時に引き戻され、少年は全身の筋肉を総動員させた渾身の突きを放った。必殺の一撃が空気との摩擦熱で、文字通り火を噴いた。

ゼストはそれも読んでいた。

自分の胴体目掛けて真っ直ぐ繰り出される突きに対して、自身も槍を突き出す。

サイズ以外は全く同じ形の二本の槍は火花を散らして交差し——少年の一撃は外側へと流された。

ゼストの突きはその上で軌道を一ミリもずらす事なく、少年の胸を打つ。

穂先は彼の魔力で生成した光の膜に、厚くくるまれていた。

それでも、少年は体内で爆弾が爆発したような衝撃を受けて、肺の中の空気を全て吐き出してその場に沈んだ。

「槍とはこう使う物だ」

言いながらゼストは手をかざし、少年の身体を光輪で拘束した。

「俺はお前たちを助けに来たのだ。おとなしくしていれば、危害はくわえん」

「あ、あのチビどもは……」

「既に保護した」

「そうかよ……」

少年は未だに萎えぬ闘志を、視線と共にゼストに投げかける。

「なら、今日の晩飯は俺が独り占めだな！」

全身の筋肉を膨らませて、捕縛輪を引きちぎろうとする少年の、まだ戦おうとするそのハートの強さに、ゼストは半分感心し、半分呆れていた。

『隊長！』

不意にゼストの顔の高さの空間に、小さなモニターが浮かび上がった。

モニターに映っているのは前髪を左右に分けた長髪の女性。部下のメガーヌ・アルピーノである。

「どうした」

『そちらのエリアに巨大物体が接近中です。魔力反応がない事から、機動兵器と思われます』

「わかった。お前たちは保護した少女たちの安全を最優先しろ」

『了解です。お気を付けて』

メガーヌは速やかに通信を切る。ゼストの強さに対する信頼が伺えた。

「今、機動兵器つつったか！？」

「こちらに接近中らしい」

「そいつはきつとグレンデルだ」

「友達か？」

「んな訳あるか！ ここの奴等が作ってた戦闘ロボットだ！」

「大きさは？」

「以前見た時は、七、八メートルくらいだったぜ」

「武装は？」

「そこまで知るか！ 良いからサッサと逃げろ！」

思わぬ一言が、ゼストの耳に響いた。

「お前は、俺を倒すのではなかったのか？」

「だから言っただ！ テメーは俺がぶっ倒す！ 他の奴等に横取りされてたまるか！」

そこへ、少年の怒鳴り声をかき消さんばかりの轟音と共に、壁が砕かれた。

「心配するな」

ゼストは穏やかに微笑み、崩れ落ちる壁の向こうを見据えた。

瓦礫を踏み越えて姿を現したのは、頭部の中央に四つの目を光らせる機械の巨人。身を屈めて窮屈そうに入って来るなり、ゼストに視線を落とす。

「あいつ等々！ 俺をけしかけてる隙にグレンデル起動させやがったに違いねえ！ あいつ等もとっくに逃げ出してるぜ、クソが！」

少年は口汚く罵りながら、捕縛輪を外そうと尚ももがく。芋虫のように床の上でのたくる体軀を、半球状の光が覆った。ゼストが張った防御障壁であった。

「心配するなと言ったぞ」

ゼストは振り向かないまま、優しく語りかける。

「俺は負けん」

そして、巨人に対して、槍を構えた。

巨人グレンデルが、右の拳を振り上げる。

施設内での戦闘を考慮して武装を外したのか、元々ありはしないのか、徒手空拳で戦うつもりらしい。

ゼストの身の丈ほどもある巨拳が、砲弾のごとく繰り出された。

「フンッ！」

ゼストはその迫り来る剛拳目掛けて槍を突き出す。

その一撃で、轟音と共にグレンデルのパンチが止まった。

瞬間、巨人の右肩が内部から爆発する。肩を失った腕は、縦に真っ二つに割れながら床の上に崩れ落ちた。

ゼストの打ち込んだ突きの衝撃がグレンデルの肩にまで到達し、爆発したのである。

次いでゼストは、穂先に魔力光を纏わせた槍を、横一文字に振り抜く。

魔力光は刃となって、グレンデルの両足を膝から切断した。

床に倒れ伏した巨体を、グレンデルは残った左腕だけで支える。

その巨人の後頭部に飛び乗ったゼストは、僅かな装甲の隙間目掛けて槍を突き刺す。槍の柄尻、一回り太くなっている石突きがスライド稼働して、内部から銃弾の薬莢が排出される。次いで、槍の柄に光輪が浮かび上がった。それは物質加速の魔法。

「ハアッ！」

気合い一閃、加速魔法によって槍を伝って超高速射出された魔力が、グレンデルの頭部を内側から爆発させた。

大量の魔力を圧縮充填した弾薬を撃発させて、瞬時に魔力の補充を行うカートリッジ・システムと、加速魔法との合わせ技だった。

瞬く間に巨人を撃破したゼストは、その戦いを見ていた少年に歩

み寄り、防御障壁を解除した。

「……あんた、本当に人間か？」

「そのつもりだ」

真面目に返答しつつ、ゼストは床に転がったままの少年を起こしてやった。

「そういえば、名前を聞いてなかったな。お前の名前は？」

不意に尋ねられて、少年は一瞬思い出そうとするように視線を逸らした後、名乗った。

「タイプ・ゼロ・ファーストだ」

——それは名前とは言わない。

そんな言葉を口にしかけて、ゼストはやめた。

名前を聞かれて彼がそう答えたのなら、それが彼にとっての名前なのだ……今までは。

「呼びにくい名前だな」

「だったら、あんたの呼びやすいように呼べよ」

少年はふてくされてるが、彼の方からきっかけをくれたのはありがたい。

「そうだな……」

ゼストの脳裏に、先程の彼との戦いが浮かび上がる。

「古代ベルカ語で、全てを薙ぎ払う烈風を意味する言葉……」

この少年には、きっと似合う名前だろう。

「ラファールガと名付けよう」

「ラファールガ……ラファールガ……」

少年は何度か繰り返して、ニヤリと笑った。

「格好良いじゃねえか」

どうやら気に入ったようだった。

02：ミニ隊長って感じね

時空管理局に保護された三人の戦闘機人実験体『タイプ・ゼロ』。いずれも局員の遺伝子から造られたクローンに改造手術を施された存在である。

彼等は奇しくも、各自のオリジナルとなる局員に養子という形で引き取られる事になった。

タイプ・ゼロ・セカンドはギンガ、その妹に当たる、同じ遺伝子から造られたサードはスバルと名付けられて、クイント・ナカジマとその夫のゲンヤ・ナカジマに引き取られた。

そして彼女たちが兄のように慕っていた、ゼスト・グランガイツの遺伝子から造られたタイプ・ゼロ・ファースト……ラファーガは、そのゼストの息子となっていた。

妻のいないゼストであったが、第一管理世界ミッドチルダでは、十歳以上の児童を養子とする場合のみ、子供を養えるだけの収入があれば片親でも養子縁組みが認められる。

三人の生い立ちが生い立ちだけに、事はスムーズには運ばなかった。しかし、ゼストたちの上司であるレジアス・ゲイズ中将の働きかけによって、子供たちは親を持つ事が出来るようになったのだった。



ラファーガがグランガイツ姓を得てから一ヶ月が過ぎた。

小さな平屋建てのグランガイツ宅。屋根の上には、どこの家庭にもある魔力発電パネルが設置されてある。

ミッドチルダの空には、太陽の他に複数の月が常に浮かんでいる。その月から降り注ぐ魔力素を吸収して電気に変換するのがこのパネルの役割だ。

この月からの魔力素は、ミッドチルダで活動する魔導師や騎士の魔法の動力源でもあった。

慎重しやかな自宅の裏庭に、少年は呼び出された。

「何の用だよ」

シャツにトレーニングパンツ、スニーカー、どれも黒で統一した出で立ちのラファーガは、ムスツとした顔で養父となった男を睨みつける。

「預かっていた物を返す」

似たような服装のゼストが渡したのは、保護した時に没収していた槍だった。

「ありがてえ！」

ラファーガはひったくるように受け取ると、嬉しそうに振り回し始めた。

彼はゼストと親子の間柄になってからも、ずっと不機嫌そうな顔をしていた。時々、ナカジマ夫妻に引き取られた二人の妹に逢わせたりやつたりもしたが、どこことなくつまらなさそうだった。

それが、槍を受け取った途端に上機嫌である。息子のその様子に、ゼストは溜め息をついた。

養子にしてから度々、ラファーガは「槍がないと落ち着かない」とぼやいていた。違法研究施設でも、槍は肌身離さず持ち歩いていたらしい。

武器を与えたままの状態で、施設の研究者たちはどうやって彼を制御していたのか……ゼストの疑問に答えたのは、ナカジマ夫妻に引き取られたギンガとスバルだった。

二人の少女曰わく、彼女たちが半ば人質に近い形で、彼の手枷足枷となっていたという。

更に意外な話も聞いた。

泣いてばかりで戦闘機人としての性能をろくに発揮出来なかったスバルは、罰として食事を与えられない事がよくあった。

そんな時はラファールが性能テストで高い結果を出し、褒美に二人分の食事を要求。それをスバルに分け与えていたという。

スバルだけでなく、姉のギンガも口を揃えて同じ事を言うのだから、間違いないだろう。

誰彼構わず噛みつく、反抗的で粗暴な野良犬にも、野良犬なりの情はあるらしい。

その野良犬が、槍を返してもらった途端に、玩具をもらった子犬のようにはいしゃいでいた。

「今からお前に、槍の使い方教える」

「いらねーよ」

ゼストが一瞬耳を疑うほどの、鮮やかな即答だった。

「今更あんたに習わなくても、俺は最強だからな。何なら、今ここで試してみるか？」

「……良かろう」

ゼストは右手を前に突き出した。人差し指に、指輪が嵌められている。

「来たれ、不屈の槍よ」

唱えた瞬間指輪が光り、手の中で槍に変わった。

「便利なモン持ちやがって……！」

その様子を見たラファーガは、唸るように毒づいた。

「別に羨ましくなんかねーけどな！」

説得力の欠片もない事を言いながら、槍を振りかぶりゼストに襲い掛かる。

上下左右から繰り出される薙払いの連撃。

しかしゼストは、一打一打が放たれる寸前に、先読みで回避していた。

大袈裟に位置を変えず、体をひねり、傾け、攻撃の軌道からミリ単位で身を外す。

振り回すだけでは当たらないと知ったラファーガは、攻撃を突きに変更した。

が、その突きはゼストの体をすり抜けた——ように見えた。

実際は、ゼストは右に踏み出しながら身をひねってかわしていた。最小限の動きを最速で実行したために、少年の戦闘機人として強化された視覚ですら錯覚を起こしたのだ。

ゼストの左手が、ラファーガの槍を掴む。片手で無造作に掴まれただけなのに、押せども引けどもビクともしない。

「うおっ!？」

不意に体が浮き上がり、ラファーガは声を上げた。

槍を掴む左腕の力だけで、少年はゼストの頭上に高々と持ち上げられていた。

——ズドンッ！

直後、轟音が響いた。

庭の地面に小さなクレーターが出来上がり、その中心に、槍を握ったままのラファールが埋め込まれていた。

「確かにお前の攻撃力は最強かも知れんが、当たらない攻撃など何の意味もない」

ラファールは答えられなかった。

「自分の攻撃を当てるための、そして敵の攻撃に当たらないようにするための技術。それらを全て叩き込んでやる」

ゼストは続けながら、息子を助け起こしてやる。

「そして真に最強の騎士となって、俺に勝ってみせろ」

ラファールは全身を地面に強く叩きつけられながらも、意識はあった。

闘志を漲らせた眼差しで父親を睨みつける。

その口が、歯を剥き出しにして笑った。

「や、やってやろうじゃねえか……」

その時、ゼストの唇もその端が僅かに上がった。

指導はその日の内に始められた。

槍の握り方。

重心の位置。

両足にかける体重の配分。

ゼストは構え一つにも事細かなチェックを行う。

突き方も同様だった。

後ろ足で地面を蹴り、前足を強く踏み込む事でその慣性を上半身に伝える。体幹の回転によってその慣性を増幅させながら腕に伝え、槍を“射出”する。

感覚的な事でもあるためラファールは上手く理解出来なかったが、かと言って投げ出したりはせず、何度も空突きをやって、それを理解しようとは懸命だった。

ゼストも表現を変えて説明し直し、また自ら手本も示した。

昼を過ぎ、夕方になり、夜を迎えても、親子の修行は続いていた。



ラファールたちが保護されてから、二年が過ぎた。

ミッドチルダ首都クラナガンに林立する高層ビルの中でも、一際高く大きな建物。そこが時空管理局ミッドチルダ地上本部である。

城とも見紛うその威容に、所属する局員の宿舍、各部隊の足となる装甲車やヘリコプターの格納庫、魔導師たちが使うデバイスの整備施設など、あらゆる施設や設備が内包されている。

その内の一つ、首都防衛隊待機室に歓声が上がった。

「可愛いっ！」

女性局員たちの歓声の的は、ラファールだった。時空管理局地上本部の制服に身を包み、もちろんネクタイも締めている。

「可愛いとか言うな！」

ラファールは赤くなりながら怒鳴り返すが、そんな彼に対して、より一層大きな「可愛い」コールが浴びせられる。

「しょうがないでしょ？」 実際可愛いんだから」

ポンポンと彼の頭をはたいたのは、クイント・ナカジマだった。

「何て言うかこう……ミニ隊長って感じね」

朗らかに言っただけなのは、メガーヌ・アルピーノである。

「今日から我々と共に働く事になったラファエル・グランガイツ。皆も知ってると思うが、俺が養子として引き取った」

「よろしくお願いします！」

ふてくされながら挨拶するラファエル。「可愛い」コールは未だにやまない。

「ナカジマ、アルピーノ。お前たちに預ける。面倒を見てやってくれ」

「はい」

指名された二人は声を揃えて敬礼する。

クイントはラファエルと顔見知りで、メガーヌは彼女とはプライベートでも仲が良く、やはりラファエルとも顔見知りだ。

「それじゃあラフ。早速一仕事してもらおうよ？」

クイントがニックネームでラファエルを呼ぶ。

「うっす」

「一番隅っこのロッカーに掃除用具が入ってるから、お掃除お願いね」

「……は？」

「いやゝ、今朝はちよつとバタバタしてて、掃除してなかったのよねゝ。これからあんたがお世話になる職場なんだから、敬意と感謝の気持ちを込めて、しっかりやるのよ？」

「んなもん女にやらせろよ！ 何で俺がそんな雑用しなきゃなんねーんだよ！」

最初から反抗的な態度丸出しのラファールがだったが、クイントはニヤニヤ笑うだけだった。

「ちよつとアルピーノの奥さん、聞きました？ この子掃除が出来ないんですって」

「あらあら、私たちなんで毎日持ち回りでやってるのに」

「情けないわねゝ。私たちでも出来る事が出来ないなんて、あの立派な体格は飾りなのかしら」

一見顔を寄せ合つての内緒話だが、しっかりとラファールが聞かしている。というより聞かせている。

「……やってやろうじゃねえか！」

ラファールはズカズカとロッカーに歩み寄り、箒と塵取りを出して床を掃き始めた。

他の隊員たちはそれを面白そうに見守る。彼等の中にも何人か、配属当初に同じ目に遭った者がいた。

「そんな乱暴じゃ駄目よ？ 箒はこうやって使うの」

メガーヌが背後からラファールの手に自分の手を重ねて、やり方を指導する。

化粧の匂いが少年の鼻腔を優しくくすぐった。

「これも大事なお仕事よ？ 人の目は意識してる以上にいろんな物を見てて、人の心は意識してる以上にそれらの影響を受けるの。だから周りが散らかってたり埃っぽいだけで、気持ちが乱れてきたりするの」

「はぁ……」

「だから、今ラフがやってる事はみんなの為になるし、ラフ自身の為にもなるわ。だから、もっと丁寧にやりましょうね？」

「……うっす」

メガーヌの温和な気に当てられて、ラファールは大人しくなる。そもそも、父親であるゼストに追い付き追い越すための手段として、管理局入りを選んだのだ。

彼のそばで彼の戦いを見る事で、自分にはない物を得る。

その為に勉強して、研修も受けた。

性に合わない事も我慢した。

常に自分をゼストと比較続けた“あいつ等”を見返すために。

そしてゼストを超える最強の“戦士”になるために、だ。

(それに比べりゃぁ……)

この程度の雑用、大した事ではない。ラファールは自分にそう言い聞かせて、掃除に励んだ。

女性隊員たちがその様を見ながらクスクスと笑っていた。

「やっぱり可愛いわよね」

「何かいじりたくなっちゃう……」

配属初日からいじられキャラ認定を受けるラファールであった。

「本当に良いんですか、隊長」

クイントがゼストに問いかける。

「せっかく自由になれたのに、局員になったらまた戦いの世界に逆戻りなんじゃ……」

「血の気の多いあいつにはちょうど良い」

ゼストは事も無げに答える。

「あいつは例えるなら、岩だ。一見大きく、形もゴツゴツとして立派に見えるが、その反面、もろく削れやすい部分も多い。矯正するにはそのもろい部分を削り取っていくしかない……これ以上削れる部分のない、丸みはあるが頑丈な石になるか、途中で砕け散るかは、あいつ次第だ」

「普通の学校とかでは、出来ない事ですか？」

「あいつの戦闘力が邪魔になる」

「……確かに」

何度かこの親子の練習風景を見た事があるクイントは、うなずかざるを得ない。技術ではまだ及ばないものの、彼女の目から見てもラファールガのパワーはゼストに次ぐ。

言っでは悪いが、些細な事でクラスメートに大怪我を負わせかねない。

「手間をかけるが、面倒を見てやってくれ」
「了解」

掃除に勤しむ息子を見守る父親に、クイントは微笑ましい気持ちで敬礼した。

03：デビュー戦だ

時空管理局首都防衛隊訓練室。

夕方の自由時間に、ラファールは一人、槍術の練習に励んでいた。下は制服のままだが、上半身は上着を脱いで黒のシャツのみ。一挙動の度に筋肉がうねる肌には、しっとりと汗が浮かんでいる。何もない空間に漆黒の穂先を突き出す度に、風切り音が響いた。

「精が出るわね、ラフくん」

不意に出入り口の方角から呼びかけられて、ラファールは槍を振るう手を止めて振り向いた。

いつの間に入室したのか、豊かな金髪を一本の三つ編みにまとめた女性局員が一人、ドアのそばに設置されたベンチに足を組んで座っていた。

同じ首都防衛隊のシェリル・アルデュイナ三等空尉。スピード殺法を得意とし、“疾風”の異名を持つベルカ騎士である。“烈風”を意味する名を持つラファールには親近感を抱いており、よく声をかけている。

「うっす」

ラファールは一礼してから、練習を続ける。

シェリルは微笑みを浮かべたまま、その様子を眺めていた。

（こういうところはゼスト隊長そっくりね……）

一つの事に黙々と打ち込む少年に、自分たちの上司の姿を思い起こさせる。

しかし普段の態度が粗暴な分、ラファールの方がより真面目にやっているようにも見えた。

「うっしゅあっ！」

練習の仕上げなのか、ラファールは一際大きな声で叫び、槍を突く。

瞬間、五メートルほど離れた正面の壁がビリビリと微かな音を立てた。突きの風圧によるものだ。

「頑張るわね」

「うっす」

再び、それだけの素っ気ない返事。

「ゼスト隊長に早く追い付きたいもんね」

「……そうじゃねえッス」

「ん？」

「追い付きたいんじゃないって、追い越してえ……親父をぶっ倒してえんだ」

「どうして？」

シェリルの当然の質問に、ラファールは視線を床に伸びる影に落とし、黙り込んだ。

「教えてよ。誰にも言わないからさ」

「……あんたにゃあ関係ねえだろ」

ラファールは不機嫌そうにシェリルを睨みつける。

槍が光を發して指輪になり、少年の右手人差し指に収まった。

「怒らない怒らない」

シェリルは後輩の態度に不快感を示す風もなく、その鍛えた腕に抱きつく。制服の下の豊かな二つの膨らみが、押し当てられた。しかしラファーガはそれをあっさり振りほどく。

「メシ食ってきます」

ベンチに置いていた制服の上着を掴み、訓練室を出ようとした時、召集が掛かった。



市街地で違法魔導師の集団が、破壊活動を行っている。その鎮圧が今回の任務であった。

現場に急行する輸送ヘリ内で、ゼストが簡潔に指示を出す。第二分隊が先行して結界を構築、違法魔導師たちを隔離する。次いで第一分隊が結界内に突入して彼等を取り押さえる。

「ラファーガ。お前は第二分隊よりも更に先行して、敵の注意を引きつけろ」

ゼストの命令に、ラファーガは歯を剥き出しにして笑った。

「文字通りの一番槍か……やってやるぜ！」
「殺しちゃダメよ？」

クイントがすかさず口を挟む。

「わかってるよ……姐さん、俺を何だと思ってんだ」

唸り声を上げて睨みつけるラファーガ。まあまあとそれをなだめるメガーヌ。

少年が配属されて以来何度も繰り広げてきた漫才に、他の隊員たちも苦笑する。

少しして、ヘリは現場上空に到着する。

「各員、降下準備！」

ゼストの檄に、全員の表情が引き締まる。

ヘリのハッチが開かれ、黄昏時の街が眼下に広がった。所々から閃光がほとばしり、爆発が起きている。

「吼えろ、無敵の槍よ！」

ラファーガの声に従い、指輪が光り槍に変わる。

漆黒の刃に埋め込まれた紅玉――デバイス・コアが煌めき、少年の制服を分解、騎士服あるいは騎士甲冑と呼ばれる防護服へと再構成した。

装甲で保護された手足。

グレーのインナーウェアの上から黒の袖無しコート。

ゼストの騎士服の色違いと言った感じだ。

「デビュー戦だ、ハジけていくぜ！」

ハッチから飛び出すラファーガは、初出撃の緊張など感じさせない威勢の良さだ。暑い夏の日にプールに飛び込む子供のようなはしゃぎぶりだが、その眼には、獲物を見つけた餓狼にも似た狂暴性も宿っていた。

流れ星のごとく地上目掛けて突き進むラファーガの瞳が、金色に輝く。強化された視覚が、群集のただ中で杖型デバイスを振るう魔導師の姿を鮮明に捉えた。

槍の穂先を、山吹色に輝く魔力光の膜で覆う。

少年の胸中に、殺人への嫌悪や躊躇はない。当然、忌避感もない。しかしクイントが殺すなど命じた。逆らえば後がうるさい。

それに、ゼストならばやはり殺さずに奴等を叩き伏せてみせるだろう。ならば、自分もやってみせる。

「おおらあああつっ！」

野獣のような咆哮を上げて、魔導師の頭上に槍を叩きつける。

今まさに一組の親子に砲撃魔法を浴びせようとした魔導師は、落雷にも似た一撃で呻き声すら上げずに昏倒した。

敵はまだ五人いた。

突然の闖入者に対して、一斉に杖型デバイスを向ける。

ラファーガの背後には、まだ親子がいた。

五人の魔導師はデバイスの先端に砲撃魔法陣を展開。圧縮した魔力を放射した。

五色の閃光がラファーガの大柄な体躯に突き刺さる――が、少年はよろめきすらしなかった。

防御障壁の類を張り巡らせてもいないのに、身に纏う騎士服にも焦げ目一つ付いてない。

有り得ない光景に魔導師たちが呆然とする中、メガーヌ・アルピノ率いる第二分隊が降下。結界を構築する。

外部の時間の流れから切り離し、効果範囲内を別空間にしてしまふ封時結界。対象以外の人物は結界の外に弾き出されるため、街中でも戦闘空間を確保すると同時に、被害の拡大と敵の逃走を防ぐ事が出来る。

もちろん、この結界を突破する魔法プログラムも存在する。違法

魔導師の一人がそれを起動させようとした瞬間、デバイスの先端が切断された。

第二分隊の張り巡らせた封時結界に突入した第一分隊。その先鋒を務める“疾風”シェリル・アルデュイナ。彼女の両の手には、深い水底のように青く輝く細身の双剣が握られていた。

双剣型アームデバイス“ブラウシュナイデ”。

切っ先を魔力光でコーティングしての鋭い刺突を腹に受けた魔導師は、その場に倒れ伏した。

シェリルは同時に、もう片方の剣で別の魔導師の喉を突き、昏倒させる。

その背後にデバイスを突きつける別の魔導師の眼前を、光の壁が遮った。

その壁の向こうから響くエンジン音は、クイント・ナカジマのローラスケート型デバイス“ソニックキャリバー”の雄叫び。

光の壁は彼女の希少技能“ウイングロード”によって生み出された道であった。

縦横無尽に張り巡らせて、空中すら走る事の出来る魔法の道は、その頑強性故に壁にもなる。

「ラフ！」

クイントが叫ぶ。

それを待つまでもなく、ラファールは残る三人の魔導師を同一射線上に捉えていた。

足下にベルカ式魔法陣を展開。物質加速魔法を自らに施す。

地を蹴った瞬間、ラファールの肉体は一個の高初速弾と化して、三人の魔導師を撃ち抜いた。

魔力光でコーティングした槍がその肉体を貫く事はなかったが、超高速での突撃によって三人まとめて吹き飛ばされ、事前にクイントが伸長させておいたウイングロードの壁にぶつかった。

「わたたっ……」

その衝撃は、充分距離を取っていた筈のクイントの足下にまで震動となって到達し、よろめかせた。

「たく、馬鹿力なんだから……」

ウイングロードから下りて道路に着地したクイントは、呆れながら違法魔導師たちを捕縛輪で拘束した。



逮捕劇はほんの数分で終わり、捕らえられた違法魔導師たちは連行された。

だが彼等がクラナガンの街並みに刻んだ爪跡は、残されたままだ。巨大なクレーターが出来た車道。

地割れを起こした歩道では、破損した地下水道管から水が噴き出ている。

周辺のビルも窓ガラスが割れ、壁が碎け、外から内装が見える箇所もあった。

救急隊が駆け付け、魔導師が治癒魔法で怪我人に応急手当を施して、順次病院へ搬送していく。

ラファールはその様子を退屈そうに眺めていた。

戦いが終われば、こんな所に用はない。早く隊舎に戻って、夕食を食べたかった。

（今日はデザートにプリンが付いてるってのによ……）

早く戻らねば、食堂が閉まってしまうのではないか。そんなつま

らない焦りで、軽く苛立っていた。

そこへ、つんざくような悲鳴が響いた。

「エリオ！ エリオおおおっ！」

何事かとラファールがその声の方を向く。

女性が赤い髪の幼い少年を抱きかかえ、揺さぶっていた。

「エリオ、お願いだから目を開けて！ 返事をして！」

涙で顔をクシャクシャにしながら、恐らくは息子であろう少年に語りかける。

しかし、額から血を流しているその子供は目を閉じ、何も答えない。

「エリオ！ あとでオモチャでも何でも買ってあげるから！ アイスクリームもお腹いっぱい食べさせてあげるから！ だから目を開けてちょうだい、エリオおおおっ！」

――馬鹿か。

母親の悲痛な叫びに、ラファールはただそう思うだけだった。

（そのチビガキはもう死んでるんだ。それくらいもわからねーのか？）

冷めた気持ちで、母親を眺め続ける。

救急隊員がやって来て、子供を遺体袋に納めようとする。母親は半狂乱になってそれを止めた。

「いやあああっ！ エリオは死んでなんかないっ！ 気を失ってる

だけなの！ もうすぐ目を開けるはずなのよ！ だから連れて行かないで！ エリオを連れて行かないでええええっ！」

泣き叫ぶ母親を別の救急隊員が取り押さえる。

その隊員の陰に隠れてラファールからは見えなくなったが、鎮静剤でも打ち込んだのだろうか、母親の悲鳴はすぐにおさまった。

「子供を亡くしたようだな」

ゼストが、いつの間にかそばに立っていた。

「母親にとって子供は、自分の体の一部も同然だ。あんな幼いうちに亡くすのは、自分の手足を引きちぎられるよりもまだ辛いだろう」
「……くだらねえ」

ラファールは眉根を寄せて、吐き捨てるようにつぶやいた。
ゼストは息子の肩にポンと手を置いた。

「お前にも、いずれわかる時が来る」

諭すように、ただそう言った。



その夜。

まだ書類仕事を残しているゼストを隊舎に残して、ラファールは一人帰宅していた。

シャワーを浴びて、髪も乾かぬ内に床に就く。

照明を消した暗闇の中で、あの母親の声が蘇った。
胸がざわつく。

研究施設にいた頃もそうだった。食事抜きのパを受けてお腹を空かせたスバルの泣き声を聞くと、胸がざわつき、不快でたまらなかった。

（アイツはメシをやれば泣きやんだが……）

息子を失ったあの母親は、どうすれば泣きやませる事が出来るだろうか？

死んだ人間は、決して生き返らないのだ。

（じゃあ、あの母親は……）

ずっと泣き続ける事になるのだろうか。
これから、永遠に。

（……くだらねえ）

ラファールは胸中で毒づいた。
名前も知らない人間の心配をして何になるのか。
何故赤の他人の心配をせねばならないのか。
そんな事に考えを巡らせる自分が、わからなかった。

「くだらねえ……」

まだ耳から離れない母親の泣き声をかき消そうとするように、ラファールは声に出してつぶやいた。



ゼストは隊舎にて、先程の出勤記録を閲覧していた。

自分の槍と、先行したシェリルとクイントのデバイス、それぞれの記録映像を、デスクの椅子に座って何度も確かめる。

繰り返し返しているのは、息子が魔導師の砲撃魔法の集中砲火を浴びている映像だ。

何度見ても、やはりラファールは防御してる様子はない。

更に興味深いのは、モニターの端に表示された魔力反応だ。

ラファールが砲撃魔法を浴びた直後、彼の魔力反応が急激に上昇していた。

「……見極めてみる必要があるな」

ゼストはデスクの脇の電話を取り、番号を入力する。夜も遅いが、どうせ相手もまだ残っているだろう。思った通り、相手はすぐに出た。

「レジアス、一つ頼みがある。本局にも顔の利くお前なら出来るだろう。砲撃魔導師との模擬戦をセッティングしてほしいのだが……」

04…インヒューレントスキルとでも言うべきか

時空管理局地上本部。

一階ロビーで、制服姿のラファーガとゼストが立っていた。

そこへやって来たのは、ナカジマ親子だ。

クイントと、年上の夫のゲンヤ。ともに制服姿の二人の娘であり、ラファーガにとっては妹同然のギンガとスバル。

「ラフ兄〜！」

スバルは正面玄関のドアをくぐるなり、ラファーガの姿を見つけてトコトコと駆け寄る。

ラファーガはただ「おう」と言っ、スバルのショートヘアをポンポンと叩いただけだった。

「ラフ兄さん、こんにちは」

ギンガも駆け寄って、こちらはぺこりと可愛らしくお辞儀した。ラファーガはこれにも「おう」と返すのみである。

「お前、もうちょっと愛想良くしてやったらどうだ？」

「そうよ。二人ともバッチリおめかししたんだから、誉めてあげても良いでしょ？　っていうか誉めなさい」

「ほっといてくれ」

ゲンヤとクイントに対しても素っ気ない態度を取るラファーガ。

「ねえねえ、ラフ兄」

「何だよ」

クイクイとズボンを引っ張るスバルに、ラファールが身を屈める。

「隙ありっつ！」

その背中に、ギンガが飛び乗った。更にスバルも、ラファールの足を踏み台にしてよじ登り、首にしがみつく。

「登るなテメー等あ！ 俺はジャングルジムじゃねえ！」

怒鳴りつけるラファールがだが、二人の少女はどこ吹く風とはしゃぐ。

「仲が良いわね」

「姐さん、笑ってねえで注意しろよ！ 叱れ！」 「でも、あんたも楽しそうじゃない。顔にやけてるわよ？」

ほら、とクイントが六角形の宝石のペンダントを取り出す。彼女のデバイス“ソニックキャリバー”の待機形態だが、この状態でも記録機能は使える。

ソニックキャリバーが空中に投影する、リアルタイムで記録中の映像には、険の取れた穏やかな表情のラファールが映っていた。

「ははっ、確かに楽しそうにしてらあ」

「後でプリントアウトしてもらおうか」

「任せてください、隊長」

ゼストのリクエストに、クイントは爽やかなサムズアップで答えた。

初出勤から一週間が過ぎ、今日は本局で健康診断を受ける日だった。言い換えるなら、定期メンテナンスである。

戦闘機人はその存在がようやく明らかになったばかりで、地上本部にはその技術ノウハウ自体がない。

対して本局は、次元の海を渡って様々な管理世界で活動しているために技術も発達しており、機械による改造を受けた三人の健康管理などを行えるだけの設備もあった。ラファールたちのこの定期診断の段取りを付けたのも、レジアス・ゲイズ中將である。

「揃っておるようだな」

そのレジアス・ゲイズ中將が、秘書官を連れて姿を現す。

恰幅の良い体格に、角刈りの髪と豊かな口髭。鋭い目つき。

実際の地位こそ副本部長だが、本部長からほぼ全権を任されている男である。

ラファールたちは即座に敬礼した。

「レジアスおじさん、こんにちは！」

ギンガとスバルもすぐにラファールから下りて、ぺこりとお辞儀する。

「おお、こんにちは。今日も元気だな」

レジアスは二人の少女の頭を撫でて、顔を崩した。

「ゼスト。例の件は準備しておる。向こうについたら、よろしく言っておいてくれ」

「はっ！」

ゼストとレジアスは旧知の間柄ではあるが、人前という事もあり、ゼストは部下として応対した。

「くれぐれも気を付けてな」

レジアスはそう言って、ロビーを出る。

ラファールたちはロビーの奥の、本局行き転送魔法ポートに入った。

大きめのエレベーター程度の広さの部屋で、床に転送魔法陣が描かれてある。

壁のタッチパネルを操作すると、魔法陣が光り出し、六人を時空管理局本局へと送った。



次元の海と形容される空間に浮かぶ巨大建造物が、時空管理局の本局である。

地上本部同様に、局員のための居住区やデバイス整備施設、訓練場などを内包している。それに加えて、各次元世界へ行くための艦船を収容する港も存在していた。

この本局自体が、一つの都市として機能していると言っても、過言ではあるまい。

医療区画で定期検診を終えた後、ラファールはゼストに連れられて、訓練区画に移動した。

そこで、豊かな緑色の髪をした女性が待っていた。傍らには黒い髪の小柄な少年と、栗色の髪を二つに結った更に幼い少女が立っていた。

「初めまして、騎士ゼスト」

女性は穏やかに挨拶して、握手を求める。

「次元航行艦アースラの艦長を務めております、リンディ・ハラオウンです」

「ミッドチルダ地上本部・首都防衛隊ゼスト・グランガイツ一等空尉です」

ゼストも自己紹介して、握手に応じる。

その功績と普段の言動から、階級ではなく騎士の称号でゼストを呼ぶ者は多い。

「こちらは、息子のラファーガ・グランガイツ三等陸士です」

ゼストは、傍らで退屈そうに辺りを見渡している息子を紹介しながら、念話で「ご挨拶しろ」とたしなめる。

「ラファーガ・グランガイツ三等陸士であります」

半ばふてくされたような態度で敬礼するラファーガ。

リンディはそれを不快に思う事はなく、傍らの二人を紹介した。

「息子のクロノ・ハラオウン執務官です」

「初めまして」

少年は小柄な体躯に似合わぬ大人びた物腰で、ゼストと握手を交わし、ラファーガにも握手を求めた。

「……まさかこんなチビが、俺の相手だとか言うんじゃないだろうなあ」

この訓練区画に連れて来られた理由を既に知らされているラファールは、不満を露わにして、差し出されたクロノの手をはたく。
“チビ”の一語に、クロノは微かに眉をひそめた。

「いえ、あなたの相手はこちらですよ」

リンディはにこやかに、クロノの傍らの少女を示した。

「アースラ所属の囑託魔導師をやってもらってる、高町なのはさんです」

「こ、こんにちは……」

紹介された少女はおずおずと頭を下げた。ラファールガの体躯と粗暴な態度を怖がっているようだ。

「……あの、すみません。このチビガキが、何？」

「ですからアースラ所属の囑託魔導師を」

「じゃねえ！ もっと前！」

「ですからこちらは私の息子の」

「戻りすぎだ！ その後だよ！」

「ですから、この子が本日のあなたの模擬戦のお相手を務める高町なのはさんですよ？」

「……………」

ラファールガはポカンと口を開けたまま、ゼストを見やる。

「強力な砲撃魔導師を、というこちらのリクエストに応じてくださった」

ゼストはただそう答えるだけだった。

「全力全開で頑張りますので、よろしく願いします……」

なのはもう一度、ぺこりと可愛らしくお辞儀をした。

「ふざけてんのかよ……こんなチビが、俺の相手になる訳ねえだろ」
「確かにな」

ゼストがラファールに同意した――

「お前の未熟なベルカ式では、近付く事も出来ずに撃墜されるだろう」

――ように見せかけて、息子を挑発する。

「言ったな、クソ親父く！」

ラファールは歯を剥き出しにして唸り声を上げる。
その様に、なのははクロノの袖を掴んだ。

「上等だ！ やってやろうじゃねえか！ こんなクソチビ、頭から喰ってやる！」

「な、なのはは美味しくないですよ!？」

「いや、そういう意味じゃないから」

自分の後ろに隠れた少女に、クロノはいたって冷静にツツコミを入れた。



模擬戦の場所となるのは、結界魔法を応用して様々なシチュエーションを再現出来る、シミュレーションルーム。

青く晴れ渡る空から、太陽が強い陽射しを投げかける荒野。障害物のないロケーション内を、ラファールは駆け回っていた。

上空から降り注ぐ薄桃色の光弾は、なのはが放つ射撃魔法アクセルシューター。十を越す魔力球が少女の意志で自在に軌道を変化させて、ラファールに上昇と接近を許さない。

ラファールの脳裏に、先程のゼストの挑発の言葉が浮かび上がり、それが彼を苛立たせた。

（どいつもこいつも、俺を舐めやがって……！）

大きく深呼吸して、槍を構える。

光弾の群れはそのラファールの周囲を、様子をうかがうように飛び回る。

上空からなのはも、相手の出方をうかがっていた。

野球ボールほどの大きさのアクセルシューターは、同じ大きさと速度で飛び交う射撃魔法弾すら撃ち落とす精度を誇る。そのアクセルシューターをかわし続けた年上の少年の技量に、なのはは素直な敬意と共に、対戦相手としての警戒心も抱いていた。

ラファールの足下に、ベルカ式魔法陣が浮かび上がった。

——仕掛けてくる！

直感したなのはは、出掛かりを押さえようとアクセルシューターに攻撃させる。

ラファールは槍を横一文字に振って光弾を薙ぎ払おうとするが、なのはのとっさの操作によって光弾は彼の背後へと回り込んだ。

——が、ラファールは最初から読んでいたかのように、すかさずそちらに向き直った。

両の瞳が金色に光っている。

直後、マシンガンすら上回る超高速の連続突きが、アクセルシューターの光弾をことごとく打ち抜いた。

（ハンダート・フォーゼッツオンか……）

管制室のモニターでそれを見たゼストが、胸中で呟いた。

古代ベルカ式魔法による攻撃技の一つで、本来なら自身の肉体に高速運動や筋力強化の魔法を施して放つ超高速の連続攻撃である。しかしラファールは、それを戦闘機人として強化された筋力のみでやってのけたのだ。

現に、彼の足下の魔法陣は未だその役割を残しているかのように浮かび上がったままだ。

ラファールがその魔法陣を蹴ると爆発が起き、その勢いで彼の身体は弾丸のごとく、なのは目掛けて飛翔する。

“スペラ・プラッツァー”——ミッドチルダ式魔法のバリアバーストと同じ、防御面を爆発させて衝撃を相殺する防御魔法だが、ラファールはこれを高速移動の更なる高初速化に利用したのだ。しかも、二つの魔法の起動にタイムラグがなかった。つまり二つの効果を一つの魔法プログラムにまとめたという事だ。

（あいつなりに、少しは頭を使っているようだな……）

ゼストの口角が、わずかに上がった。

高初速弾と化したラファールは瞬時に、なのはを槍の射程に捉えた。

運動エネルギーを槍の切っ先一点に集中させた一撃が放たれる。

しかしその一撃は、事前に張られた防御障壁に阻まれた。

なのはの左手に握られた金色の杖“レイジングハート・エクセリオン”は、人工知能を搭載したインテリジェントデバイスだ。アク

セルシューターを迎撃された時点で、その人工知能が次に来るであろう反撃に備えていたのである。

（このガキ……！）

防御障壁の強度そのものは、術者の魔力保有量に大きく左右される。

槍を通して伝わったその障壁の強度は、少女がその小柄で可愛らしい外見からは想像も出来ない程の魔力量を有している事を、ラファーガに教えていた。

なのはなのは、アクセルシューターを打ち落とされた事、瞬時に距離を詰められた事に驚いていた。

しかしレイジングハート・エクセリオンが機転を利かせて守ってくれたこの一瞬を、無駄にしてはならない。

愛杖を構え、砲撃魔法陣を展開。杖の前後に円環状の魔法陣が浮かび上がった。

「ディバイイーン……バスター！」

放たれた必殺の砲撃。

薄桃色の光の奔流が、防御障壁もろともラファーガを呑み込んだ。砲撃魔法の閃光は、その後急速にその幅を収束させていき――、

（えっ？）

照射は続けているのに、何故収束していくのか？

初めて見る現象に面食らったなのはの目に、照射を終えて砲撃が収まった後も尚、空中で平然と佇むラファーガの姿が映った。

「至近距離で砲撃ぶっ放しやがって、クソガキが……」

槍の柄を片手で握り締め、ラファールはそれを大きく振りかぶった。

「ビックリしたじゃねーか！」

山吹色の魔力光で厚くくるまれた穂先が、唸りを上げて振り下ろされる。

《バリアバースト》

レイジングハート・エクセリオンの先端部分、ルビーのような光沢のデバイスコアが煌めいて魔法を自動行使。展開された爆裂障壁がその一撃を受け止め、爆煙が二人を包み込んで、視界を覆った。その煙の繭の中から、いち早くなのはが脱出して距離を取った。

「変ねえ。直撃したように見えたのだけど……」

管制室でリンディは、人差し指を唇に当てて、小首を傾げる。

「当たったけど、当たってません」

疑問に答えたのは、クロノだった。

「砲撃が収まるのがいつもより早過ぎるし、その後彼の魔力量が上昇した……恐らく、彼は相手の魔力を吸収したんだと思います」

「命中はしたけど、ダメージはないという訳ね」

息子の言葉の意味を、リンディは理解した。

「ですが、その吸収のための魔法を行使したようには見えませんでした……通常の魔法とも、希少技能とも違うように思えます」

クロノはチラリとゼストの顔を見上げた。

「騎士ゼストは以前、違法研究施設から三人の子供を救出なさったとかかっています」

「あれがその一人です、ハラOWN執務官」

ゼストはうなずき、素直に返答した。

「あの魔力吸収能力は、その施設で与えられた能力でしょう。魔法とは別の能力……インヒューレントスキルとでも言うべきか……そういうったものを生まれる段階で植え付けられたのかも知れません」

「厄介な相手ですね……」

クロノは知らず、自分がラファールと戦う時の事を想定していた。アクセルシューターを打ち落とす近接戦闘技能。

聞いた話では自分と同じ年らしいが、とてもそうとは思えない体格から生み出されるであろうパワー。

そして、あの特殊能力である。

「まるで、魔導師を倒すために生まれたかのような相手だな……」

少年の小さな呟きを、ゼストは聞き取っていた。

（それが戦闘機人としての、あいつのコンセプトか……）

何とも言えない複雑な気持ちを抱えたまま、ゼストはモニター内で続く息子の戦いに視線を戻す。

シミュレーションルーム内は、なのはが放つ砲撃・射撃魔法の輝きが乱舞する眩い戦場と化していた。

レイジングハート・エクセリオンの分析で、ラファールが魔力を吸収出来る事はわかっていた。

だが、その能力は意識して使うものなのか？ 隙を突かれれば、能力の発動も間に合わないのではないか？

アクセルシューターよりも操作性は劣るが、移動しながら撃てるもう一つの射撃魔法“ディバインシューター”を繰り出し、なのはは距離を保ったままラファールを牽制する。

先程に比べて動きが単調な魔法弾を、ラファールは槍を振るって叩き落とすが、その内の一発が意志を持っているかのように槍をかわして、顔面に命中する。

ディバインシューターの中に一発だけ混ぜ込ませた、アクセルシューターの弾丸だった。

だがラファールは、その不意を突いた一発すら吸収してしまう。

「こんな弾ところが……！」

ダメージはないものの、かわせなかったという事実が許せないのか、ラファールは怒りで顔を歪ませる。

《マスター。プランAは失敗のようです》

レイジングハート・エクセリオンが冷静に主へ報告した。

魔力吸収能力は常時発動しているらしく、不意を突いた一撃も意味がないようだ。

《魔力散布は充分です。プランBに移行しましょう》

「うん！」

なのはは元気良くなずき、次の魔法プログラムを構築していく。

「――次はどんな花火だ」

少女の周囲の空間に、星の瞬きにも似た無数の光が浮かび上がった。

何をするつもりかはわからないが、彼女は砲撃魔導師。本領たる砲撃魔法を使うに決まっている。

ラファーガもまた、どんな状況であれ、どんな敵であれ、槍の届く距離まで近付いて貫くのみだ。

「終わりにするぜ、クソガキい！」

ラファーガの足下の空間に、ベルカ式魔法陣が展開される。先程使った爆裂障壁と高速移動の併用魔法。

魔法陣を爆裂させて、ラファーガはその勢いを使って突撃する。

だがなのはは恐れない。真っ直ぐに飛び込んで来るのならば望むところだ。

《バレルショット》

レイジングハート・エクセリオンのデバイスコアが煌めいて、杖の先端から衝撃波が放たれた。

魔力を変換して生み出した衝撃波は吸収出来ない。真正面からラファーガに直撃し、突進の勢いを相殺する。まともにくらったラファーガは再突撃をしようとして、自分の身体が動かない事に気付いた。

「あのガキ……」

衝撃波で動きを止め、不可視の捕縛輪で相手を固定する。本命となる砲撃を放つ前の固め技に、ラファールは見事にはまってしまった。

なのはの周囲に発生した魔力光が、流星雨のように前面に集まる。デバイスの先端部分に搭載したカートリッジ・システムも使って、更に魔力を充填、圧縮する。

「全力全開！」

準備は整った。後は解き放つのみ。

「スターライト……！」

レイジングハート・エクセリオンが、円環状の砲撃魔法陣に包まれた。

「ブレイカアアアーツツツ！」

術者自身の魔力とカートリッジ内の魔力、更に砲撃や射撃の後で周辺に拡散した魔力をかき集めて放つ集束砲撃。

桁違いの、凶暴さすら感じさせる閃光の奔流。

先のバレルショットは、この集束砲撃の減衰や拡散を防ぎ、確実に相手に直撃させるための通り道となるバレル——銃身を形成させるための物でもあった。

レイジングハート・エクセリオンの言ったプランBとは、相手の吸収能力の限界を超えたこの大規模砲撃を指していた。

薄桃色の光は太陽のような激しい輝きの中にラファールを呑み込み、なのはの視界すら眩ませた。

管制室で試合をモニタリングしていた局員たちも、そしてゼストも、その威力にただ目を見張る。

魔力放出が終わり、なのはが砲撃の構えを解いた。

そのあどけない顔に、勝利の喜びはない。

魔力反応を今まで以上に増幅させたラファーガが、何事もなかったかのように空中に浮いていた。

（スターライトブレイカーも吸収しちゃうなんて……）

不思議と悔しさはなかった。

《マスター。プランCに移行しますか？》

小さな手に握られたデバイスが尋ねる。

「ううん、もう良いよ」

なのははフルフルと首を横に振り、「お疲れ様」と呟き、デバイスコアにキスをして――待機形態に戻した。

「何の真似だ！」

反撃に移ろうとしたラファーガは、紅玉のペンダントを首に掛けるなのはに怒鳴りつける。

「降参します」

なのはは怒声に臆する事なく返答した。

「今が私の最大攻撃です。あれが通用しないなら、私にはもう戦う手段がないです。だから、降参します！」

言いながらゆっくりと降下して、地面に降りる。

「ふざけてんのか……」

ラファールは歯を軋らせ、唸る。

少女の小さな体軀からは、まだ戦闘可能な魔力量を感じ取れる。
なのに、もう戦えないなどと……。

「大嘘ぶっこいてんじゃねえ！」

落雷にも似た激しさで、ラファールはなのはの目の前に降り立った。

「俺を舐めてんのか！ テメーまだ戦えるだろうが！」

「無理です。魔力を吸収されるだけってわかってるのに戦うなんて、
レイジングハートに余計な負担をかけるだけです。そんな事出来ません」

なのはは胸元のペンダントを握り締めて答えた。

年上の少年に凄まれて、膝から力が抜けてしまいそうだが、それをこらえてラファールの目を真っ直ぐに見る。

その態度がラファールを苛つかせた。

デバイスが幾ら壊れようが、それで敵を倒せるなら、問題ない筈だ。たかが道具を惜しみ、戦いを放棄するなど、理解不能だった。

何よりも、こんな決着は納得出来ない。ラファールにとって、勝利とは相手から力づくで奪うものであり、戦いとはそうやって終わらせるものだ。

なのに、目の前にいる小さな少女はそれをしない。

彼女の考えが理解出来ず、ラファールは更に苛立ちを募らせた。

「……くそつたれがあ！」

怒鳴り散らし、槍を片手で振り上げる。

なのはは思わず目を閉じた。

だが振り下ろされた槍は——ラファールが身を捻った事で、彼の真横の地面を砕くだけに終わった。

「勝手にしろ」

ラファールも槍を待機形態に戻し、ふてくされて座り込む。

その様子がなのはには、自分よりももっと小さな男の子が、ヘソを曲げて拗ねてるように見えた。

「どうしちゃったのかしら……」

管制室でリンディがまたもや小首を傾げた。

クロノには、なのはの降参の理由がわかった。

スターライトブレイカーすら吸収する相手に対する攻撃方法は、魔力以外の物をぶつける事。例えば、地面の小石を加速魔法で高速で発射したりだ。実際レイジングハート・エクセリオンの言ったプランCこそがそれである。

だがこのやり方では、相手の魔力生成器官リンカーコアに直接ダメージを与え、肉体へのダメージを避ける非殺傷設定が使えない。小石を魔力の膜で厚くくるんだところで、内臓や脳へのダメージをゼロに出来る訳ではないのだ。

退くに退けない、敗北の許されない戦いならともかく、ただの模擬戦でそんな危険な方法は使えない。なのはのような心の優しい少女なら、尚更だろう。

なのはにはエクセリオンモードと呼ばれる強力な戦闘モードもあるが、デバイスへの負担も大きく、愛杖を本当の友達のように思っ

ている彼女が、たかが模擬戦でこれを使うとはやはり考えにくい。
クロノはそれを母親に説明した。

「後に退けない戦いならともかく、そうでない場合なら相手を傷付ける事はしたくない。彼女はそういう性格です」

「そうだったわね」

リンディは納得したようだ。

すぐそばで聞いていたゼストも、「なるほど、あの少女なら……」
と得心がいく。

（ラファールガ。お前もいつかきつと、わかる筈だ……）

ゼストはモニターに映る息子に、胸中で語り掛ける。

騎士たる者、悪戯に武威を誇示して他者を傷付ける事はしてはならないのだ。

モニター内でラファールガは、なのはに謝られながら未だにふてくされていた。

05…槍は槍だろ

「うおおおおおっ！」

地上本部訓練棟のシミュレーションルームに、ラファーガの咆哮が響く。

室内に設定されているロケーションは、ビルが林立する市街地。飛行魔法で低空飛行する少年が怒りの形相で狙う標的は、模擬戦での仮想敵として開発されたオートスフィアAM-109——その外観から、タカアシガニと渾名されている魔導戦闘機械である。

目の役割を果たすセンサーを周囲に埋め込まれた樽のような胴体に、大人の背丈ほどもある脚が八本備わっており、その内の前方にある二本が腕の役割を果たす。

鉗状の腕からは射撃魔法と砲撃魔法を放つ事が可能で、八体のオートスフィアたちはタイヤの付いた六本の脚で滑らかに移動しながら、ラファーガに光弾を浴びせていた。

「まだムカつくぞ、チックシヨオオオオオッ！」

——三日前の高町なのはとの模擬戦の事を、少年はまだ引きずっていた。

自分の胸にも届かないチビを倒せずに終わった事が気に入らない。そのチビが、戦えるだけの余力を残していながら試合放棄したのが気に入らない。

彼自身が後から気付いた事だが、石などを物質加速魔法で弾丸に変えて撃ち出す方法もあったのだ。あれだけ強力な砲撃魔法を使える魔導師が、それを知らないとは思えない。

「クソチビが、俺を舐めやがってええええっ！」

あんな小さな女の子に手加減された。ラファールにはそうしか
思えず、故に三日経っても苛立ちがおさまらずにいた。

迫り来る光弾の雨に、ラファールは瞳を金色に輝かせながら突っ
込んでいく。

機体内の人工リンカーコアから生成された魔力の光弾は、彼の体
に触れた瞬間吸収されて、ダメージにはならない。

「うっだらあああああっ！」

吸収した魔力を飛行魔法の出力に回して加速したラファールは、
槍を脇にしっかりと抱えて、一番近い位置にいるタカアシガニの胴
体目掛けて突撃した。

中世の騎士のランスチャージのような、強力な一撃。

漆黒の刃がオートスフィアの胴体部装甲に突き刺さり、陥没させる。

——ボンッ！

直後、背中側の装甲が内側から爆発した。突きの衝撃が胴体を通
り抜けて背中中に到達したのだ。

ラファールは引き抜いた槍を両手で持ち直して振り上げる。

「おおおおらあっ！」

戦闘不能になったオートスフィアに、トドメとばかりに魔力で強
化した大上段の斬撃を打ち込んだ。

胴体を真っ二つに断ち割られたタカアシガニは、哀れそのまま道
路に崩れ落ちる。

『何やってんの、このお馬鹿！』

次の敵に躍り掛からんとした瞬間、行く手を遮るように通信用光学モニターが少年の眼前に現れる。

同時に、残りのオートスフィアも停止命令を受けて、動きを止めていた。

モニターいっぱいになり顔を映しながら、クイント・ナカジマが怒鳴りつける。

『インヒューレントスキルは使うなって言ったでしょうが！ あんたの防御技術を磨くための訓練なのよ！？』

「――あつ」

言われてラファーガは思い出す。

『“あつ”て何？ あんた本当に忘れてたの！？ ほんの二、三分前に言った事でしようが！』

「うっせえな！ しょうがねえだろ、いつもこのやり方なんだから！」

『だから、それを変えるための訓練なんですよ！』

「わかってるよ！ 次はきっちりやれば良いんだろ！ 良いから見ろ！」

ラファーガはモニターに槍を叩きつけて消去すると、停止したままのオートスフィアに向き直った。

「ふ、ふふふふ……どうやらお尻ペンペンしなきゃわからないみたいねえ〜！」

管制室でクイントは、引きつった笑みを浮かべながら、パキポキと指を鳴らす。

ラファールガのいつも以上に反抗的な態度に、かなり頭に來たようだ。

「あらあら、そんなに怒ってばかりだと小ジワが増えるわよ？」

傍らにいたメガーン・アルピーノが朗らかな笑顔で、友人をなだめた。

「でも、確かに今のあの子は、少し頭を冷やす必要があるかしら……あんなにカッコしてるのは良くないわ」

「その役目は俺たちにお任せ願いますか？」

背後からメガーンに語り掛けたのは、癖の強い金髪の優男だった。傍らには、ゼストよりも更に頭一つ分背の高い、浅黒い肌の巨漢が付んでいる。背丈に見合った幅と厚みのある巨体は、岩というより山に近い。

優男はピート・アンダーソン空曹、巨漢はダグラス・ジョンソン三等空尉。いずれも彼女たちの同僚である。

「ここで俺たちも、先輩としての威厳を見せておきたいんでね」「構わないわ！　いつでも出動出来る程度に足腰立たなくしてあげて！」

クイントがわかるようなわからないような事を言う。

「仰せのままに」

ピートは胸に手を当てて大袈裟に一礼すると、管制室を出る。ダグラスは無言でその後続いた。

「それじゃあ、あの子たちは巻き添えをくわないよう下がらせましよう」

メガーヌはオペレーター席のキーボードを操作して、待機中のオートスフィアを撤退させる。

「……あん？」

破壊したオートスフィアの残骸の上に座り込んで、敵の再起動を待っていたラファーガ。

管制室でのやり取りなど知る由もなく、突然後退し始めた標的群を見て首を傾げる。

——が、不意に迫り来る魔力反応を感じ取り、大きく後ろへ跳んだ。

瞬間、三つの魔力弾が残骸に突き刺さる。

魔力弾はそのまま消えたりはせず、再び宙に浮き上がり、融合して一つの大口径弾に変化してラファーガに迫る。

ラファーガの槍が、陽炎めいた山吹色の光に包まれ、円環状の魔法陣を長柄にまとった。

「フンッ！」

大地を踏みしめ、鋭く放たれる槍の一突き。それが迫り来る魔力弾を止め——、

「ハアッ！」

槍に施された加速魔法で、付与された魔力が高速で放射されて弾丸を破碎した。

古代ベルカで『ツザムンファルン・オースワクオン』と呼ばれる

多段攻撃。

「ゼスト隊長ほどじゃあねえが、なかなかやるじゃねえか」

上空からの声にラファーガが見上げると、バリアジャケットをまとったピートが浮遊魔法で宙に浮いていた。

黒のコートの上から銀色のプロテクターを付けた、管理局内では一般的なデザインのバリアジャケット。

その右手に握られているのは先端の円盤状パーツにデバイスコアを埋め込んだ、簡素な形の杖型デバイス。射撃魔法の制御に特化した調整を施したストレージデバイス『ワイズマン・ロッド』。

「こいつはどうだ？」

《ステインガー・スコール》

ピートが杖の先端を地上のラファーガに向けると、デバイスコアが煌めき、スコールの名に違わぬ光弾の雨が降り注ぐ。

「今度はあんたが相手してくれんのか？」

ラファーガは、ゼストと同じ青い瞳でそれを見ながら、自身に筋力強化と高速運動の魔法を施した。

直後、降り注ぐ弾幕めがけて無数の突きが放たれる。

戦闘機人の力ではなく、古代ベルカ式魔法として放ったハンダー・フォーゼツォン。寸分違わぬ正確さで、光弾の雨を一つ一つ確実に迎撃していく。

しかし最後の一発を打ち落としたラファーガの右手、彼が背中を向けているビルの壁を粉碎して、砲撃が放たれた。

——否、それは砲撃ではない。

円錐に尖った防御障壁が、ドリルのように螺旋回転しながら接近

してきたのだ。

その障壁と共に、砲撃魔法と見紛う勢いで突進してきたのは、袖のない騎士服をまとい、剥き出しの太い両腕に武骨なガントレットを装着したダグラスであった。

「ダグさん!？」

ラファールが相手に気付いた時には、その巨体が目と鼻の先にまで迫っていた。

ピートのステインガー・スコールを迎撃し終えた直後に発生する僅かな隙。そこにタイミングを合わせたシオルダーチャージに、ラファールはなす術もなく吹き飛ばされて、反対側のビルの壁に身体をめり込ませた。

「流石はダグさん……」

交通事故かと思わせるほどの凄まじい攻撃に、上空のピートは苦笑いを浮かべる。

ダグラスはシールド系を始めた防御魔法のエキスパートだ。ゼストですら真っ正面からの突破に手こずるほど頑強な防御障壁は、その巨体が繰り出すパワーと相俟って恐るべき攻撃武器にも変化する。

普段はゼスト以上に寡黙で温厚だが、敵に回せば恐るべき暴走列車となって迫り来る猛攻者。それがダグラス・ジョンソンだった。

「ラフ坊は生きてるかな……」

ダグラスの突撃をまともにくらい、派手に吹き飛んだ。

何かと反抗的なラファールがお灸を据えるつもりだった。ピートだったが、少し心配になってきた。

しかし、それは杞憂に過ぎなかった。

めり込んでいた壁から脱したラファールは、しっかりと足取りでアスファルトの地面を踏みしめる。

その身体から揺らめき立つ陽炎は、衝撃緩和を目的とした防御フィールドだった。

ダグラスはラファールに戦闘続行の意志と余力があるのを感じ取り、再びシールドを張り巡らせる。

ピートも射撃魔法の照準をラファールに合わせ、いつでも撃てる準備をする。派手な砲撃魔法こそ苦手だが、彼の射撃魔法は正確無比。死角に潜む標的すら撃ち抜ける。

二人に作戦などという大袈裟なものはない。各自が得意分野で勝負を仕掛けるのみだ。ただ、その得意分野が自然と連携を生み出しているのである。

ダグラスが突撃を仕掛けた。

ラファールは逆手に構えた槍を地面に突き立てて、一気に引く。

梃子の原理で引き剥がされたアスファルトを漆黒の刃で切り刻み、ダグラスめがけて打ち出した。

アスファルトの塊は、表面を螺旋回転させているシールドに弾かれる。

地を蹴って宙に舞ったラファールは、そうやって弾き飛ばされた破片を足場にした八艘跳びで空中を移動して、ダグラスの背後に回り込んだ。

ダグラスはシールドにぶつかる破片に視界を攪乱されて、彼の姿を見失っていた。

「甘い甘い！」

ラファールがめがけて、ピートは射撃魔法を発射する。

《クロスファイア・シュート》

「ファイア！」

周囲に発生した複数の魔力弾が、同時に降り注ぐ。

ラファールはこれも読んでいた。

ピートの本当の恐ろしさは射撃魔法の精度ではなく、相手の僅かな隙も見逃さない“眼”にある。

今まで模擬戦で、何度攻撃の出掛かりを射撃魔法で潰された事か……その苦い経験が、逆にピートの攻撃のタイミングを教えてくれていた。

上空から襲い来る魔力弾を、ダグラスの背中めがけて槍で弾き飛ばす。一発二発では揺るがないダグラスだが、十を越す魔力弾を連続で浴びて、バランスを失って転倒した。

「やべっ……！」

結果的にダグラスを撃った事ではない。

一時的にダグラスを退けたラファールが、次の攻撃の準備に入った事に対して、ピートは焦りの声を漏らした。

ラファールは上空のピートを見上げ、足下にベルカ式魔法陣を展開させる。

物質加速を施した自身の肉体を、爆裂障壁を使って発射させる複合魔法攻撃“エラプション・オウフラデュン”。

ラファールの本当の狙いは、ピートの撃墜だった。攻撃直後の隙を、今度は自分が文字通りに突く算段だった。

歯を剥き出しにして、ラファールは笑う。

そして、足下の魔法陣を蹴った。

爆発——そして、発射。噴火によって撃ち出された火山弾のごとく、ラファールは槍を突き出したまま飛翔する。

ピートの次の射撃魔法も、しかしギリギリで間に合っていた。ストレージデバイスのプログラム処理速度は、一世代上のインテリジ

エントデバイスとも互角だ。その利点が効を奏した。

再び放たれたクロスファイア・シュートの魔力弾がラファーガの身体を直撃し、少年の突撃の軌道をずらした。

ほんの一瞬に起きた僅かなズレ。長距離狙撃でミリ単位の照準のズレが、メートル単位の着弾のズレを生むように、ラファーガはピートの横をむなく通り過ぎていき――軌道の延長線上にある高層ビルに激突した。

勝利を確信した攻撃の真っ最中の、予想だにしていなかった事態。今度は防御フィールドで身を守る事も出来ず、ラファーガは気を失った――。



目を覚ますと、清潔な白い天井があった。

鼻腔をくすぐる、薬品の匂い。

医務室のベッドに横たわっている事に、ラファーガは気付いた。

身を起こすと、ベッドの傍らにダグラスの巨体が佇んでいる事に気付き、声を上げこそはしなかったがかなり驚いた。

ダグラスはムクリと立ち上がり、ちょうど入室してきたメガースに顎でベッドを指し示し、ラファーガが目を覚ました事を教えた。

（本当に無口だな……）

軽く身を屈めて、出入り口のドアをくぐり退室するダグラスの背中を見送りつつ、ラファーガは半ば呆れていた。

思えば、首都防衛隊に配属されてからダグラスの声を聞いた事は一度もなかった。

「ラフ、気分はどう？」

メガーヌが枕元に手を突き、前屈みに尋ねた。
顔が近い。

ほのかに香る香水の匂い。

ラフアーガは妙な気恥ずかしさを覚えた。

「だ、大丈夫ッス……」

「本当に？ あなたは大丈夫じゃなくても大丈夫って言っちゃうタイプだから、ちょっと心配だわ」

「大丈夫ッス」

ラフアーガはもう一度繰り返す。

「ラフ！ 目を覚ましたのね！？」

「ラフくん、お見舞いに来たわよ」

そこへクイントと、シェリル・アルデュイナも入室してきた。

「まったくもう！ 思いっきりぶつかってピクリとも動かないから心配したのよ！？」

最初の怒りはどこへやら、クイントはベッドに歩み寄るなりラフアーガを抱き締める。

制服越しに、柔らかな胸の膨らみを顔に押し付けられる形になったラフアーガは、息苦しさから強引に彼女を引き剥がした。

「殺す気かよ。苦しいだろ」

「そんな減らず口叩けるくらいなら、心配いらないみたいね」

「流石はラフくん。頑丈さも隊長譲りね」

呆れつつも安心するクイント。シェリルがコロコロと笑い、メガ

ーヌとクイントも釣られて笑った。

またゼストと比較されたと感じて、ラファールだけが仏頂面だ。
ふと自分の手に目線を落とすと、指輪がない事に気付いた。

「俺の槍は？」

「ああ、それなら整備に出してるわ。本当に派手にビルと激突したしね」

「もう二時間は経ってるし、そろそろチェックも終わってる頃じゃないかしら」

クイントの答えに、メガーヌがそう付け加える。

その言葉から、自分が二時間以上は気絶していた事をラファールが知った。

「取りに行ってきます」

ラファールはベッドから下りて、壁のハンガーに掛けられていた自分の上着を着た。

「一人で行ける？」

「大丈夫ッス」

クイントにそう答えて医務室が出るが、やはり心配なのか、結局三人とも強引に付いて来た。

整備部は三つの課に分かれている。一課が隊舎内の設備、二課がヘリコプターや装甲車など、そして三課がデバイスの整備を担当している。

その整備三課の作業室を訪れると、女性局員が一人で、検査台に乗せた剣と杖の整備をやっていた。

と言っても、機械が自動的に台の上のデバイスをスキャンして、状態チェックを行っており、彼女はその作業状況を眺めているだけだった。

「俺の槍を取りに来た」

女性局員にそう言うのと、彼女は壁際の台に置いてあった指輪を取って、手渡した。

「ちょっと刃先が欠けていたので研ぎ直しました。フレームに破損はなし。システムや保存されてある魔法プログラムにも異常なしです」

「ありがとうございます」

ラファールは受け取ると、起動パスワードを唱えて指輪から槍へと変型させた。

両手で握り、構える。

違和感はない。

歯車と歯車がガツチリと噛み合うような一体感に、知らず微笑みが浮かぶ。

少年にとって、この槍は自分の力の象徴であり、最も信頼出来る存在であり、最早自身の一部と言っても過言ではなかった。

「やっぱり親子なんですねえ。ゼスト隊長も、デバイスを受け取ると嬉しそうな顔をするんですよ」

女性局員がラファールの様子を見て、そう言った。

彼女は、目の前の少年の事情は知らない。彼がゼストの本当の息子だと思っている。

「そう言えば、デバイスに名前を付けてないところもそっくりですね」

「え？ ラフくん、デバイスに名前付けてないの？」

シェリルが驚いて少年を見やる。

デバイスは魔導師や騎士にとって、大事な道具だ。

同一規格の量産品でも、個々人に合わせた調整やカスタマイズが施されている事が多々ある。

単に魔法の行使に便利だからというだけではない深い愛着があり、持ち主に合わせて製作されるインテリジェントデバイスやアームドデバイスは当然の事、量産品に至っては形式番号以外に愛称を付け、そちらで呼ぶ魔導師もいる。

だが、ゼストの槍には名前がなかった。

彼の槍は、彼が古代ベルカ式魔法を学び始めた時から、その手にあった。

共に厳しい修行に耐え、幾多の修羅場をくぐり抜けてきた槍に対して、気が付けば自分の手足も同然の一体感を覚えていた。

故に、ゼストの槍には名前がなかった。

「名前を付けるという行為自体が、何やらよそよそしく感じられてな」

そう言って珍しくはにかむ寡黙な騎士の姿を、クイントとメガーヌは記憶している。

「だって、槍は槍だろ」

シェリルの問いに、ラファールがそう答えた。

「自分の手足に名前付いたりなんかしねーだろ？ それと同じだよ」

言いながら、槍を指輪に戻してはめる。

「……名前を付けるのがよそよそしいような気がするとか？」

ゼストの言葉を思い出したクイントが、おずおずと尋ねる。

「そんなじゃねえけどよ。名前なんかなくったって、こいつがこの世で一番信じられる物なのは間違いないんだ。だから、それで充分なんだよ」

ラファールは答えながら、クイントから視線を逸らした。

「あーん！ 照れてるラフくん可愛いー！」

シェリルがガバツと少年を抱き締め、その豊満なバストでホールドする。

「名前すら必要としない、絶対的な信頼関係……なんてロマンチックなの……」

女性局員も何やらウツトリとしている。

クイントとメガーヌは……視線を逸らした時のラファールの顔に、かつてみたゼストと同じ表情を見出していた。

06…魔法使いなんて大っ嫌いよ！

夜の七時を過ぎる頃だった。

レジマス・ゲイズ中將は高級レストラン『サングウイス』の個室を借りて、夕食を楽しんでいた。

髭の濃い強面が、珍しく緩んでいる。

理由は、テーブルの向かいに座る少女だった。

歳は十四。肩まで伸びた金髪に緩やかなウェーブをかけた、銀縁の眼鏡のよく似合う理知的な顔立ちだ。白のブラウスと茶色のレザーパンツに包まれた身体は、年相応のスレンダーなラインを描いている。

レジマスのたった一人の愛娘、オーリス・ゲイズである。

「お父さん」

オーリスは食事の手を止めて、父親に呼びかけた。

「どうした」

「今日は、ありがとう……私の為に時間を取ってくれて」

「なに、礼を言われるほどではない。娘の誕生日も祝えん父親では、テストの点数で小言も言えんからな」

レジマスは冗談混じりに答え、グラスの中のワインを一口飲む。

今日はオーリスの十四歳の誕生日。この日に備えてレジマスは事前に休暇とレストランの予約を取っていた。

「どの道、小言を言われるような点数なんて取らないわよ」

「そうだったな。学年トップの秀才に失礼だったか」

娘の軽口にレジアスは顔がほころぶ。

（だいぶ似てきたな……）

亡き妻の面影が、娘に重なった。

反時空管理局主義の違法魔導師による破壊活動によって、彼の妻アイリスが命を落としてから早くも十年。

気性激しく、プライドの高い性格こそ正反对だが、背筋をピンと伸ばして静かにナイフとフォークを扱う姿は、若き日の妻を思い出させた。

男手一つで育て、しかも時には仕事を優先せねばならない事も何度かあったというのに、よくこうも真っ直ぐに育ってくれたものだと、レジアスは娘に奇妙な感心すら抱いていた。

食事を終えた親子は、支払いを済ませてレストランを出た。駐車場に待たせてあった車に乗ると、馴染みの運転手が「出発します」と一声かけてから、発進する。

駐車場を出た車は、クラナガンの中央通りを抜けて、郊外にある廃棄倉庫区画へ続く道に入った。

「おい、道が違うぞ」

レジアスの言葉に、運転手は「すいません」と答える。

「中将閣下にも、お話がありましたね」

レジアスの見ている前で、運転手の姿が粒子状に分解して消え、その下から頬のこけた男が現れる。

その左手には、手の甲にデバイスコアを埋め込んだグローブが装着されていた。

「おとなしくご同行願いますよ、レジアス・ゲイズ中将閣下」

その声は、空いていた助手席からだった。

短い杖型デバイスを手にした、口髭を生やした男がそこにいた。

一人は変身魔法で運転手に化け、もう一人は透明化魔法で助手席に乗り込んでいたのだ。

「私はこの態勢からでも、お嬢様を蜂の巣に出来る。無駄な抵抗はおやめいただきたい」

杖型デバイスの先端をヒラヒラと見せつけながら、男は言った。

「運転手はどうした？」

「後ろのトランクの中で眠っていますよ、ぐっすり」と

運転席の魔導師が答えた。

「もう二度と起きないでしょう」

「殺す事はなからう」

「それは考え方の違いですな」

男は平然と返し、助手席の魔導師も小馬鹿にするようにニヤニヤと笑った。

オーリスは悲鳴こそ上げないものの、思わず隣にいる父の手を握る。

不安や恐怖は確かにあったが、怯える様など決して見せないという気概が、少女の端正な顔に現れていた。

「で、私に話とは何だ？」

「それは私どものリーダーからお聞きください」

助手席の男がニヤニヤ笑いを浮かべたまま、答える。

「ただ、今度の会議であなたが提案する、質量兵器の限定解除についてだと、お答えしておきましょう」



地上本部首都防衛隊々舎。

夜勤のシフトに入っている隊員たちが待機室に集まり、待機時間を穏やかに過ごしていた。

ピートは他の隊員たちとカードゲームに興じている。

クイントは廊下の公衆電話で、家にいる娘たちとお喋りをしていた。

ラファールは室内の片隅にある休憩所のソファに座り、フライドチキンを食べながらボンヤリとテレビのニュース番組を見ている。

テーブルの上にはフライドチキンを詰め込んだ箱と、広げたティッシュの上に食べ終わった後の骨が三つ置かれていた。

テレビからは、一ヶ月後に本局で開かれる会議で、レジアスが以前から提唱していた『質量兵器の限定解除』についても話し合いが行われる事が、そのレジアスの映像と共に伝えられる。

「なあ、親父よう」

ラファールは骨の軟骨部分を歯でかじり取りながら、デスクで書類仕事をやっているゼストに呼びかけた。

「どうした」

「シツリョーヘーキノゲンテーカイジヨって何だ？」

息子の突然の質問に、ゼストはテレビの方をチラリと見た。

「質量兵器が何かはわかるか？」

「魔力を使わねー飛び道具だろ？」

「……大ざっぱに言えば、そうだな」

それにしても大ざっぱ過ぎて、ゼストは思わず苦笑した。

「だが実際は、破壊力や射程距離、攻撃範囲などによって様々な種類に分類される。手の中や袖口に隠せる小型の物から、スイッチ一つで都市を吹き飛ばせる物までな」

「そんなすげえのもあんのか……戦ってみてえなあ。さぞかしぶっ壊し甲斐があるだろうなあ！」

ラファールは歯を剥き出しにして笑った。

少年のその言葉に、その場にいた隊員たちは、槍を手にして大型ミサイルに立ち向かう彼の姿を想像してしまった。

「レジアスの言う限定解除とは、その質量兵器の中でも、個人で携行可能な物のみを使用出来るようにしようという事だ」

ゼストも同じ事を想像し、苦笑いしながら説明する。

「低ランク魔導師でも、銃器で武装する事でそれなりに戦闘力は向上する。その“それなりの戦闘力”を有する魔導師を増やして治安維持の戦力に充てようという事だ」

「なるほどな……いくら俺が最強でも、一度に二つの場所には行けねえ。片方を片付けてる間に、もう片方を逃がしたんじゃあ意味ねーよな。でも、そこそこ戦える奴等が足止めしてくれりゃ、そっちも逃がさず叩き潰せる。その足止め担当を増やそうって訳か。さす

がレジアス中将だ、頭良いぜ！」

「……実際のレジアスの考えでは、足止め担当などで済ませるつもりはないだろうがな」

あくまでも自分一人で戦うつもりか。

ゼストは息子のそうとしか思えない言葉に呆れていた。

同時に、部隊結成当初の事を思い出す。

単独先行が過ぎて、三階級も下の部下たちから

「そんなに自分たちが信用出来ませんか」

「もっと自分たちを当てにしてください」

と叱られたりしたものだ。

（俺も、とやかく言えた立場ではないか……）

懐かしさが胸を暖かく満たす。

その部下たちも今では、得意分野でなら自分を上回るほどの力に付けている。

ラファールにしても、先程の台詞からは首都防衛隊の一員としての自覚が多少なりとも感じられた。

（一部隊の長としては、俺は恵まれているのかも知れんな）

そんな充実感を確かめていると、緊急出動を要請する警報が鳴り響いた。



薄暗い倉庫内に、二十人近い男たちが集まっている。

形こそ様々だが、いずれもデバイスを所有していた。

「ようこそおいでくださいました。レジアス・ゲイズ中将閣下」

その中心にいた長髪の男が、レジアスを出迎える。

オーリスは父と引き離され、別の魔導師たちに取り押さえられていた。

「貴様が長か」

「魔導革命団体“自由の翼”のリーダー、ヴァナード・ステイングと申します。お見知りおきを」

「直接会うのは今夜が初めてだが、顔と名前は知っておる……貴様等が何をしてきたかもな」

「光栄です」

ヴァナードは胸に手を当てて、大仰に一礼してみせた。

「ご存知ならば話は早い。閣下、今度の会議での質量兵器の限定解除の提案を、取り下げていただきたい」

「何故だ？」

「銃器で武装して戦力の底上げをされては、我々も不利になるとまではないきませんが、今後の活動がやりにくくなりますからな」

「それを聞いて、私が大人しく従うと思っておるのか？」

「これは閣下のためでもあるのですよ。本局は質量兵器を極端に嫌うそうではないですか」

ヴァナードの言っている事は事実である。

そのため、時空管理局の主戦力は魔導師のみとなっている。

そしてそれこそが、レジアスの悩みの種でもあった。

魔法を行使するにはリンカーコアという器官が必要になってくる。

しかしこれは誰もが持って生まれる訳ではない。親から子へと受け継がれる訳でもなく、魔導師の子供が必ずしもリンカーコアを持っているとは限らないのだ。

また、魔法の――特に戦闘用の魔法の威力は、その持って生まれたりリンカーコアの性能にも左右される。

人材の確保や部隊戦力の均一化が難しいため、治安維持の戦力とするには、いささか心もとない力なのだ。

しかし本局は、管理局発足のきっかけとなった戦争において、質量兵器が横行した事を理由に、魔法を主戦力として取り入れる方針を続けているのである。

「条件付きとは言え、質量兵器の使用を訴えては、本局の閣下に対する印象も悪くなりましょう」

「それがどうした」

レジアスは一瞬の間も置かず、返した。

「貴様等が何をしてきたかも知っていると言ったであろう。社会の平和を乱す、違法魔導師を始めとした犯罪者を取り締まる事が出来れば、海の連中に嫌われようが呪われようが、私は一向に構わん！」
「――フン」

ヴァナードは嘲るように鼻で笑った。

「この状況で啖呵を切る度胸は認めますが、ここにはお嬢様も一緒である事をお忘れなきよう」

そして指をパチンと鳴らすと、布を引き裂くような音が響く。

レジアスが目をやれば、取り押さえられていたオーリスのブラウスがヴァナードの部下たちの手で引き裂かれて、その下のグレーの

ブラジャーと真っ白な肌をさらけ出していた。
オーリスは危うく上げそうになった悲鳴を、かろうじて飲み込んでいた。

「気丈だな」

ヴァナードはそんな少女の健気さを、小気味良さそうに眺める。
次いで彼女の目の前に歩み寄り、おもむろに横っ面を叩いた。
カツツと音を立てて、吹き飛んだ眼鏡がコンクリートの床の上に落ちた。

少女の唇から、血の筋が一つ流れ落ちる。
それでもオーリスは、目の前の違法魔導師をキッと睨みつけた。

「貴様あ！」

激昂するレジアスの身体を捕縛魔法の光輪が締め上げて、その場に固定させた。

「閣下は理想に殉じる覚悟がお有りのようですが、お嬢様はどうですか？」

レジアスの反応にヴァナードは満足げだった。

「それとも、閣下の理想のために、この場でお嬢様に犠牲になっていただきますでしょうか」

「娘は関係なからう！」

「その関係のないお嬢様が、父親の見ている前で純潔を奪われてもよろしいのですかな？」

「やれるものならやってみなさいよ」

会話に割り込んだ声に、ヴァナードもレジアスも目を見張った。
オーリスはヴァナードを睨みつけて、気丈に続ける。

「私をひどい目に遭わせれば遭わせるほど、後であなたたちに降りかかる報いが大きくなるだけよ。お父さんはどんな手段を使っても、絶対にあなたたちに復讐するんですからね！」

「黙れ」

不意に声色を冷たくして、ヴァナードはもう一度少女の頬をぶつ。
だがオーリスは不敵に笑う。

「だったら黙らせてみなさいよ、革命団体とか名乗ってる割りに、やってる事はその辺のチンピラと同じの魔法使いさん！」

挑発する少女の喉元に、ヴァナードは手にした杖の先端を押し当てた。

「本当に死にたいのか？」

「お父さんの重荷や足手まといになるくらいなら、死んだ方がマシだわ」

オーリスは怯む風もなく、言って返す。

「魔力なしの分際で……」

「その魔力なしの小娘も黙らせられないのがあなたたちよ。たまたまリンカーコアを持って生まれたただで威張り散らせるおめだいたい思考回路はちょっと羨ましいけどね」

「オーリス、よせ！」

「嫌よ」

父親の制止を、オーリスはきっぱりと拒んだ。

「この人たちはどうせ私を殺すつもりなんでしょう？　だったら死ぬ前に好き放題言わせてもらおうわ。そもそも私たちがどうして、こんな連中にへつらわなくちゃいけないのよ。リンカーコアがあるから大きな態度に出てるけど、それがなくても同じ態度に出られるの？　無理でしょうね。管理局への不満を市民にぶつけるしか出来ない腰抜けだもの！」

ヴァナードの眼がスウツと細くなった。

生意気な小娘への怒りが、殺意に変わっていく。

おもむろにオーリスの喉を掴んで持ち上げ、乱暴に床へと投げ下ろす。

「ご期待に応えて、殺してやろう！」

杖型デバイスを倒れた少女に向け、赤紫色に輝く砲撃魔法陣を展開する。

「やめろ！　娘に手を出さなくてくれ！」

「良いのよ、お父さん。その代わり、仇は取ってね。それと――」

オーリスは立ち上がり、ヴァナードを睨む。

母は違法魔導師に殺された。母を殺した奴等と同等の犯罪者に、誰が屈するものか。

そんな決意を込めて、オーリスは怒鳴ってみせた。

「魔法使いなんて大っ嫌いよ！　一人残らず死んじやえば良いんだわ！」

「貴様から死ね」

《ブラスタークャノン》

ヴァナードの冷たい声と同時に、彼のデバイスが詠唱を行う。
砲撃魔法陣から、赤紫色の閃光が少女目掛けて放たれた。

その一瞬前に、倉庫の天井が破れた。

落雷を思わせる勢いで、オーリスの前に影が立ちはだかる。

烈風のごとく現れた影に砲撃魔法が炸裂した——かに見えたが、それはよろめきもせずに堂々とそびえ立っていた。

眼鏡がないオーリスの目には、見覚えのある騎士服を纏うぼやけた背中と、右手に携えた狂暴な形の槍が映る。

「ゼストさん……？」

「じゃねえよ」

父の友人によく似た影は、不機嫌そうに答える。

そして、手にした槍の切っ先を、違法魔導師たちに突きつけた。

「時空管理局だ！ 死にてえ奴からかかって来い！」

瞳を金色に輝かせたラファールガの大音声が、雷鳴のごとく倉庫内に響く。

「管理局だと……」

手際良くレジアスを誘拐したつもりが、何故バレたのか……ヴァナードはその疑問を今は胸の奥にしまう。

「笑わせるな。たった一人で、我々を相手にするつもりか？」

「そっちこそ笑わせんなよ。まさかテメー等、たった二十人かそこらで俺と戦う気か？」

ラファールは違法魔導師たちを見渡して、齒を剥いて唸る。

「俺と戦おうってんなら、最低でも二千人は連れてこい！ 齒応えのねえ雑魚でもそんだけあれば、噛んだ気分くらいにはなれるからなあ〜！」

「ただの自信過剰な馬鹿か」

ヴァナードが杖を振り上げると、周囲の部下たちがデバイスを一斉にラファールガへ向ける。

次いで無数の射撃魔法の光弾が、倉庫内を眩く照らしながら放たれた。

だが、ラファールガは動かない。

両手で槍の長柄の真ん中を握り、高速回転させる。

ヘリコプターのプロペラのように高速回転する槍が盾となって、魔法弾を弾き飛ばした。それだけではなく、回転面に角度を付ける事で、相手側に弾き返していた。

魔導師たちは自らが放った射撃魔法の弾幕を浴びる羽目になった。跳ね返された段階で貫通力も落ちているのか、身に付けているバリアジャケットでダメージは免れたが。

「だが、これならどうだ！」

《ソリッドブラスタ》

ヴァナードが、先程のものよりも速度と貫通力を高めた砲撃魔法を撃つ。

ラファールガは槍の回転を止めて、真正面から受け止め、吸収してみせた。

「こんなもんか？」

わざとらしく肩をすくめるラファールガ。

背後でオーリスが、その様子を驚きの眼で見っていた。魔法の直撃を受けてもビクともしないとは……。

離れた所にいたレジアスも、話に聞いてはいたが実際に目の当たりにする魔力吸収能力に驚いていた。

ヴァナードたちが攻めあぐねた瞬間、出入り口から首都防衛隊の面々が雪崩れ込む。

ゼストを先頭にした隊員たちは、正確な射撃魔法で違法魔導師たちの足を止め、次々と捕縛魔法で捕らえていく。

ミッドチルダ式魔導師とベルカ式騎士とが、各自の役割に専念する事で生まれる無言のコンビネーションによって、瞬く間に二十人近い魔導師たちが逮捕された。

「無事か、レジアス」

「遅かったではないか。渋滞にでも遭ったか？」

捕縛輪を槍の切っ先で切断するゼストに、レジアスは皮肉を返す。

「そんなところだ」

ゼストはそう言って笑った。

長い付き合いだ。親友の性格は既に把握していた。

「これで勝ったと思うなよ、貴様等 ああっ！」

そこへヴァナードの怒号が響く。

取り押さえようと迫り来る隊員たちを射撃魔法で蹴散らした彼は、杖の石突きを床に突き立てた。

床の上に、赤紫色の魔法陣が広がる。

「ヴァール・ハラ・ブリューン・ヒルダ……我が呼び声に答えよ、大地の巨人！ 我が敵を砕け、ヴォルカノン！」

詠唱の後、その魔法陣の中から、全身が岩石で出来た巨人が現れる。

身の丈五メートルに届く巨体は、肩と頭部に湾曲した角を生やし、胴回りと同じくらいに膨らんだ両腕を備えていた。

「皆殺しにしてやれ、ヴォルカノン！」

ヴァナードは巨人に命令を下すと同時に、転送魔法で自分だけその場から離脱した。

『総員退避！ 一旦後退するぞ！』

伝達の確実性を優先して、ゼストは念話で部隊に命令を飛ばす。隊員たちは各自、捕らえた違法魔導師を連れて倉庫を出ようとするが、巨人はそれを呑気に待ったりはしない。大きく右拳を振り上げて、目に付いたオーリス目掛けて振り下ろした。少女は頭上から迫る巨拳に、思わず目を閉じる。

「……………？」

だが、来るであろう衝撃が来ない。

恐る恐る目を開けてみれば、目の前にラファールが立ち、左手で張った防御障壁で巨人の一撃を受け止めていた。

「大丈夫か？」

「え、ええ……」

「なら、さっさと逃げな。俺はコイツと遊ばなきゃならねえ」

「戦うつもりなの？」

「他にどうしろってんだ？ さっさと行け！」

怒鳴られたオーリスは、途中何度か振り返りながらも、倉庫の外へと走り去って行った。

「あのロン毛野郎も気が利くじゃねーか……」

防御障壁に掛かる負荷が増していくのを感じながら、ラファールは嬉しそうに笑う。

「こんな壊し甲斐のある奴を用意するなんてな！」

地を蹴って後ろに飛ぶ。

その場に残された防御障壁が、巨拳に潰された。

「オラアアアッ！」

床にめり込んだ右腕に、ラファールは両手で振りかぶった槍を叩きつける。

魔力で強化された穂先が、山吹色に輝きながら巨人の右腕を切断した。

そこへヴォルカノンの左フックが唸りを上げて迫る。

ラファールはその左拳を蹴って宙に飛び、かわした。

「拝みやがれ、俺の新必殺技！」

空中で槍を構えたラファール。

石突きのスライドカバーが稼動して、カートリッジが一発排莖さ

れた。

「ツシャアッ！」

カートリッジの魔力が充填された槍を、勢い良く突き出す。

漆黒の穂先から山吹色の竜巻が発生して、ヴォルカノンを呑み込んだ。

その竜巻の中は真空。

ラファールとヴォルカノンの間に、その真空の竜巻が道を作った。魔力フィールドで身を守りながら、ラファールは高速移動と爆裂障壁の二つの魔法を同時に起動させる。

魔力で作り出した真空の竜巻は、外部からの妨害を防ぎ、空気抵抗をゼロにして更なる加速を得るための銃身――バレルの役割を果たしていた。

「トゥナード・アングリフス！」

爆裂障壁で自らを発射したラファール。

槍を突き出したまま、空気抵抗のない真空バレル内を超高速で突き進む。

少年の身体は一個の高初速弾となって、ヴォルカノンの胸部を撃ち抜いた。

床に着地したラファールが、勢い余ってたたらを踏む。

真空竜巻が消え去り、ヴォルカノンも胸に空いた穴を中心に、全身に亀裂を走らせて崩壊した。



建ち並ぶ倉庫の間の狭い通路を、ヴァナードは走っていた。

出来れば廃棄倉庫区画の外に転移するなり、そうでなくとも飛行

魔法で飛んで逃げたいところだが、あまり大きな魔法を使うとその魔力反応で居場所を探知される恐れがあった。

どの道、この通路を抜ければ廃棄倉庫区画の出入り口だ。

しかしそこに通じる通路の出口を、空から伸びる青白い光の帯が防火シャッターのように塞いだ。

光の帯は地面すれすれでヴァナードの方へと折れ曲がる。

その帯――ウイングロードの上を、クイント・ナカジマがローラーブーツ“ソニックキャリバー”を唸らせながら駆け抜けて、ヴァナードの前に着地した。

両腕には、二枚の歯車を備えた武骨なガントレット“リボルバーナックル”が装着されている。

「何故、私の位置が……」

「優秀なナビゲーターのおかげ、とだけ言っておくわ」

クイントはゆっくりと、右拳を前に突き出し左拳を脇に引いたシューティングアーツの構えを取る。

上空に浮遊魔法で待機しつつ、逐一状況を把握していたメガヌ・アルピーノは、最初に区画内全体のロケーションを確認。予測される逃走ルートを割り出して、そこにサーチャースフィアと呼ばれる探知魔法球を設置していたのだ。

ヴァナードはそのサーチャースフィアの前に、その存在に気付きもせずに、まんまと姿をさらしてしまっていたのである。

「くそっ！」

《ガトリングショット》

ヴァナードがかざした杖から、魔法弾が無数に撃ち出される。

「トライシールド！」

クイントが突き出した右拳を開くと、ベルカ式魔法陣を象った防御障壁が発生して、弾幕を受け止める。

「シールドブラスト！」

そのまま、脇に引いていた左拳で障壁を打つと、障壁は回転しながらヴァナード目掛けて射出される。

ヴァナードは飛行魔法で上昇して、これをかわした。

倉庫の屋根よりも更に高く上昇する彼を追い掛けるように、ウイングロードが地上から伸びる。

クイントはそのまま、ウイングロードの先端をぶつけるつもりらしい。

迫り来る光の帯を、ヴァナードは防御障壁を張って受け止めた。

そのウイングロードを伝って、クイントが空中に“駆け上がる”。

右のリボルバーナックルの歯車——ナックルスピナーの根本にあるスライドカバーが稼動し、カートリッジを排出した。

充填された魔力を、スピナーの高速回転で加速させて拳に集中させる。

「一撃……」

《スピニング・ブロー》

「必倒！」

螺旋回転する魔力光を纏った右拳が、防御障壁に打ち下ろされる。

魔力光の回転はドリルの役目を果たして障壁を粉碎し、拳がヴァナードの鳩尾にめり込んだ。

ヴァナードの身体はそのまま地上へと落下し——地面に激突する寸前で捕縛輪に絡め取られて、地上僅か数センチの高さで固定された。

「違法魔導師集団リーダー、ヴァナード・ステイング。要人誘拐の現行犯により、逮捕します」

娘たちのお喋りを妨害した罪も加えたいところだが、さすがに私事に過ぎるのでそれは胸の内にしまい、クイントはウインググロードから下りてヴァナードを取り押さえた。



応援部隊が、捕らえた違法魔導師たちを護送車に連れ込んでいく。その様子を見ていたゼストに、背広を脱いだレジアスが声を掛けた。

「本当に、よく来てくれたな」

「お前の車には発信機が付いている。その反応がこんな所に移動したのだ。何かあったとスクランブルが掛かるのは当然だろう……ステイブンは、気の毒だったな」

殺された運転手の名前である。初老の温厚な紳士で、ゼストとも親交があった。

「ゼストさん、ありがとうございました」

破れたブラウスの上から父親の背広を着たオーリスも、礼を述べる。

「おい」

そんな彼女の背中に、ラファールが声を掛ける。

振り向いた少女に、ラファーガは銀縁の眼鏡を差し出した。

「落ちてたぜ。見た目女物っぽいから、お前のだろ？」

「あ、ありがとう……」

オーリスは少年の手から眼鏡を受け取り、顔に掛けた。ぼやけた視界がクリアになり、自分を守ってくれた荒々しい騎士の顔も、ハッキリと見えた。

「……………」

その騎士は、ゼストに似た顔立ちだった。若き日のゼストが目の前にいるような錯覚すら覚える。

「ちょっとレンズに傷が入ってるっぽいけど、ちゃんと見えるか？」
「ええ、大丈夫……あの、私、オーリス。オーリス・ゲイズよ。あなたは？」

「俺？」

不意に名前を聞かれ、しかしその理由はわからず、ラファーガは首を傾げる。

だが、問われて名乗れないような名前でもなし、むしろ気に入ってる名前だ。教えてやっても良いだろう。

「ラファーガ。ラファーガ・グランガイツだ、覚えとふがががっ！」

突然横から、ゼストが頬をつねり上げた。

「あの時退避しろと命令した筈だ。何故命令に背いた？ 巨人を倒した事は誉めてやるが、それと命令違反はまた別の話だ。ちょっと

来い！」

ゼストはゲイズ親子に敬礼してから、ラフアーガの頬をつねったまま引きずって去って行く。

オーリスは、その引きずられていく背中を見送っていた。

「ラフアーガ……ラフアーガさん……」

恩人の名前を小さく繰り返す少女の瞳は、熱を帯びて潤んでいた。

07..俺だけのプラスアルファ

平日のクラナガン市立図書館を、何とも不似合い極まりない人物が訪れていた。

オフシフトのラファーガである。

所狭しと並ぶ本棚の中から分厚い一冊を選び出す。

タイトルは「魔力変換の基礎と応用」。

その本を手に読書用スペースにあるテーブルに着席し、一ページ目から食い入るように読み始めた時――、少年の額にスツと女性の手が触れた。

「……何スカ、姐さん」

ラファーガが手の主に呼びかける。

「いや、あんた熱でもあるんじゃないかと思って」

答えた手の主は、クイントだった。もう一方の手を自分の額に当てている。

「熱なんてねーよ」

「だってあんたがそんな真面目に本を読むなんて、おかしいじゃない?」

「そこまで言うか! 俺だって本くらい読ふぐっ!？」

言い終わらないうちに、額に添えられていた手が口を塞いだ。

「図書館では静かにしなさい、このお馬鹿」

「~~~~~!」

何やら理不尽なものを感じて、ラファールは口の中で唸り声を上げた。

「で？ 何読んでるの？」

クイントはお構いなしに本の表紙を覗き込む。
タイトルを確認してから、プツと吹き出した。

「何だよ」

「あんた、この前のあれを気にしてたの？」

彼女の言う“この前のあれ”とは、一週間前のゼストとラファールの模擬戦である――。



少年は相変わらず、獲物に飛びかかる餓狼さながらの猛攻を繰り出し、ゼストも相変わらず、その攻撃を冷静に捌いていた。

彼の蓄積された戦闘経験から来る先読みの前では、ラファールの動きはまだまだ単調だ。

しかしその攻撃、特に槍での突きは、速さと鋭さを増している。

それは少年が訓練を怠っていない証拠だ。

だからこそ、ゼストは更なる成長を望んで、息子の攻撃を完璧に防御してみせた。

ラファールはその完璧な防御に怯む事なく、攻撃を続ける。

ゼストの顔を狙って放つ、三連続の突き。

ゼストがこれを槍の穂先で打ち払った瞬間、ラファールは自らに高速運動の魔法を施し、速度の全く違う突きを同じ軌道で放った。

「違う」

ゼストは言いながら、槍の石突きで息子の胸を突き飛ばす。距離を開けられて、ラファーガの高速突きは届かずに終わった。

「こうだ」

ゼストは踏み込んで、こちらも顔をめがけた突きを放つ。ラファーガがそれを打ち払おうとした瞬間、槍が消えた。

「ぐほっ!？」

消えたと思った瞬間、腹部に魔力の膜でくるまれた槍の一撃がめり込んだ。

「シャッテン・ブラットはこうやって使え」

古代ベルカ式魔法の戦技“シャッテン・ブラット”。フェイントを掛けてからの高速攻撃である。

高速運動魔法はフェイントの直後、突き出した槍を引くのを使う。相手がフェイントの一撃を防御しようとした時には、既にガードの空いた部位に本命の一撃が打ち込まれているという寸法だ。

「フェイントとの時間差をなくして同時攻撃を行うのがシャッテン・ブラットだ。お前のやり方では、ただの連続突きだ」

「そうかよ、悪かったな!」

せき込みながら怒鳴り返すラファーガ。

（クソが……!）

やはり強い。

自分のオリジナルなのだからこうでなくてはという安心感。

自分はこれほどの戦士の遺伝子から作られたのだという誇らしさ。そんな気持ちよりも、養父との差が少しも縮まったようには感じられない歯がゆさの方が、遥かに強かった。

（こうなりゃ一か八か、試してみるか）

ラファールは槍に内蔵されたカートリッジを一発だけ撃発させて、魔力を充填。

ゼストはそれを見て、相手の出方をうかがおうと一歩だけ間合いを広げた。

「拝みやがれクソ親父！ 俺の新必殺技・第二弾……って、あれ？」

両腕がやけに熱い。

ふと見やれば、槍もろともに、紅蓮の炎に包まれて燃え盛っていた。

「何じゃこりゃああああああっ！」

「ラファール！」

ゼストが駆け寄り、脱いだ騎士服の上着で、炎を消そうと覆い被せる。

炎はすぐに消え、ラファールは両腕に火傷を負ったが、駆けつけた医療班の治療魔法で直ぐに完治させてもらった。



「本当にビックリしたわ。てっきり隊長が人体発火現象を引き起こす魔法でも使ったのかと思ったくらいなもの」

「――ふん」

コロコロと笑うクイントに、ふてくされてそっぽを向くラファールガ。

魔法の源となる魔力とは、魔力素を体内のリンカーコアに取り込んで圧縮変換する事で生成されるエネルギーだ。このプロセスにアレンジを加える事で、魔力を炎や電気などの別のエネルギーに変える事も出来る。

これを魔力属性変換というのだが、ラファールガはその属性変換で生み出した炎の制御に失敗して、自分の腕を燃やしてしまったのである。

「竜巻は簡単に造れたから、炎を槍に纏わせるくらい簡単だって思ってたんだよ」

「感覚で魔法プログラム組むタイプによくあるミスね。で、改めて魔力変換のおさらいって訳？」

「悪いかよ」

「全然。むしろオネーサン見直したわ。エライエライ☆」

クイントはグシグシとラファールガの髪を撫でる。

しかし少年は舌打ちしてその手を払いのけた。

「わかったら邪魔しねーでくれ。俺は忙しいんだ」

言い捨てて、本に視線を落とす。

クイントは隣の席に座り、少年の横顔を眺めた。

「ねえラフ。そもそもなんで、魔力属性変換とか使おうとしてるの

？」

「親父に勝つためだ」

ラファールは振り向きもせずには答える。

「その隊長から習う古代ベルカ式じゃ、不満なの？」

「当たり前だ。親父と同じ事やってちゃ、いつまで経っても追いつけねえ」

そこで一旦本から目を離し、クイントの方を見る。

突き刺すような、鋭い眼差しだった。

「親父は俺が造られるずっと前から槍を振ってたんだ。同じ事やって、ずっと先を進んでる親父には追い付く事も出来ねえ。俺が親父に勝つためには、ベルカ式に加える俺だけのプラスアルファが必要なんだよ」

クイントは黙って、少年が胸の内を吐露するのを聞いていた。

「自分だけのプラスアルファ、ねえ……」

「属性変換をマスターすりゃあ、デア・アンファングだけでも、覚えた属性の数だけバリエーションが増えるからな……」

デア・アンファングとは、古代ベルカ式魔法の初歩となる、機先を制する一撃を指す。ボクシングでいうところのジャブ、リードブロウである。

「あんたなりに、色々考えてるのねえ」

「当たり前だろ」

ラフアーガはそれっきり黙りこくって、熱心に本を読み始めた。
クイントはその横顔を眺め続ける。

二人の娘は学校で、夫とはシフトが合わず、一人で休暇をのんびりと過ごすつもりだったが……、

（思わぬ収穫ね）

ひょっとしたらゼストですら見た事がないかも知れない、ラフアーガの珍しい一面を、クイントは楽しげに見守るのだった。



――三日後。

首都防衛大隊は訓練棟で模擬戦をやっていた。

ダグラスとクイントの試合が終わり、ゼストは次の組み合わせを告げた。

「次。シェリルとラフアーガ」

呼ばれた二人はデバイスを起動させて試合場に立つ。

「ラフくん、オネーサンに勝てたらチューしてあげるわよ☆」

「いらねーよ」

手の内で双剣をクルクル回しながらウィンクするシェリルに、ラフアーガは素っ気なく返した。

「始めっ！」

ゼストが号令を掛ける。「始め」の「め」の辺りで、ラフアーガ

が先制攻撃を掛けた。

ギャリリリッ！

金属同士のこすれ合う激しい音が響く。

ただ槍を突き出したのではなく、捻りを加える事で、穂先をドリルのように回転させたのだ。

シェリルはその螺旋回転する突きを、双剣ブラウシュナイデの左剣で受け流した。

初撃を受け流されたラファーガだが、構わず間合いを詰め、槍を振り下ろす。

シェリルは右足を軸に、身を回転させてかわす。

かわしながら、右剣をラファーガの首筋目掛けて打ち込んだ。

しかし少年は素早く側転し、青い刃はむなしく空を切る。

反撃に移りかけて、ラファーガは続けて襲い来る左剣に気付き、再び側転でかわした。

次いで右剣。

再び左剣。

また右。

左。

左右の剣が絶え間なく襲って来て、ラファーガに反撃の隙を与えない。

狙いも首筋だけではない。

肩。

胸。

腹。

果ては足首を狙った低空軌道の水面斬り。

ラファーガはこの途切れる事のない流れるような連続攻撃を、のけぞり、かがみ、跳躍し、かわし続けた。

ただかわすだけではなく、攻撃のリズムを計る。

そして、顔目掛けて放たれた右剣の突きをかわすと同時に、槍を突き出した。

シェリルの腹を狙った漆黒の穂先が、空気との摩擦熱で文字通り火を噴いた。

《バリア・バースト》

しかし、ブラウシュナイデの鏢に埋め込まれたデバイスコアが煌めき、ベルカ式魔法陣を象った障壁が発生してその一撃を受け止めた。

障壁は槍が突き刺さると同時に爆発し、ラファーガを後方に吹き飛ばす。

《ソニックムーヴ》

ブラウシュナイデの次の詠唱が響くと、シェリルの姿が消えた。

高速移動で、吹き飛ばされたラファーガの先回りをしたのだ。

飛んでくる少年の背中に、シェリルは狙いを定める。

交差させた両腕に携える双剣が、輝き始めた。

魔力を付与した状態での十文字斬りで仕留めるつもりだ。

「おやすみ、ラフくん」

《クルセイド・スラッシュ》

必勝を期した斬撃。空中に、X字の軌跡が描かれる。

しかしラファーガは、未だ宙に浮いた状態で身を捻り、床に槍を突き立ててブレーキを掛けた。

シェリルの攻撃は空を斬り――反撃の隙を彼に与える事となる。

「うっだらああああっ！」

突き立てた槍を軸に駒のように回転し、その勢いを乗せた飛び蹴りを放つ。

胸元にまともにくらったシェリルは派手に後ろへ飛んだ。

ラファーガの攻撃は終わらない。

カートリッジを一発作動させて、シェリルに追い討ちの刺突を打ち込む。

《トライ・シールド》

シェリルのブラウシュナイデが防御障壁を張って主を守った。しかし――、

「ハアッ！」

障壁に受け止められた槍の穂先から、少年の気合いと共に爆炎が放射されて、障壁を焼き払った。

「ちょっと、何よ今の！」

左方向、ラファーガの背中側へ回り込むシェリル。初めて見る攻撃に面食らっている。

（まさか、この前やろうとして失敗した攻撃……？）

その胸の内の疑問に対する答えはなく、ただ獰猛なまでの槍の連続突きが彼女を襲う。

後退しながらかわしていく内に、シェリルは徐々に部屋の一隅に追いやられていく。

見学していた隊員たちをかき分けるようにして、ついにシェリル

は二面の壁に左右を塞がれた一角に追い込まれた。

「これで……」

ラファールはグッと槍を大きく引き、再びカートリッジを撃発させる。

「終わりだ！」

床にめり込むのではないかと思わせる、深く強い踏み込みと共に、この試合中で最速の一突きを放つ。

が、シェリルは十字に交差させた双剣で、その一撃を挟み止めた。続くであろう火炎放射を避けんと、そのまま双剣を高々と頭上に掲げる。

——瞬間、彼女の肉体を電撃が走った。

槍と双剣の接点から、ラファールの魔力が電気に変換されて流し込まれたのだ。

気を失い、崩れ落ちるシェリル。

ラファールは彼女の身体を左腕で抱き止めた。

「それまでだ」

試合終了を告げるゼストの声は、いつもより心なしか明るかった。

「あいつ、電気変換まで出来るのか……」

「ちよつと前に自分の腕燃やしたばかりだったってのになあ……」

「ああ……ラフの代わりにシェリルさんを抱き止めたい……」

周りの隊員たちも、今見た光景が信じられないようだ。それはクイントも同様だった。

たったの三日で、炎熱変換を成功させて、更に電気変換までやってのけるとは……。

「……私も、ウカウカしてられないわね」

先輩として、改めて気を引き締めねばならないと自身に言い聞かせた。



その夜の事である。

「ラーフーくん☆」

夜勤組への引き継ぎを終わらせて帰ろうとしたラーファーガは、廊下でシェリルに呼び止められた。

「何ッスか？」

「今日の模擬戦なんだけどお……」

「ああ、リベンジならいつでも受け付けますぜ。何なら今、ここでも」

普段から根拠なしの自信に溢れているが、今日は魔力属性変換を成功させた事もあり、いつも以上に自信に満ち溢れた態度だ。

「そうじゃなくてさ。ほら、約束したじゃない、試合前に」

「約束？」

「そう。その約束を果たしに来たの」

「って言われても、何か約束し——」

約束してたっけ？

そう問おうとした少年の頬に、口紅鮮やかな唇が優しく触れた。

「――何すんだよ」

「何って、言ったじゃない。勝ったらチューしてあげるって」

「あれか……くだらねーギャグかと思ってたぜ」

頬に刻まれたキスマークを、袖で拭うラファーガ。

「もっと頑張ったら、もっと良い事してあげるわよ？ 大人のキスとか」

「いらねーよ」

「もう、つれないんだからあ……でもそんなラフくんも可愛い☆」

シェリルは素っ気ない態度を崩さないラファーガを抱き締め、その豊かなバストでホールドする。

「でも、次はオネーサンが勝たせてもらうわよ？ 覚えといてね」

もう一度頬に口づけをしたシェリルは、「お疲れ」と言い残して去っていく。

「何だったんだ……？」

頬を袖で拭いながら、その背中を見送るラファーガ。
やたらとくつつきたがる彼女が、どうも苦手だった。

（つーか、大人のキスって……）

つまり今のは、言うなれば“子供のキス”という事だろうか？

「……くだらねえ」

結局子供扱いされてる訳だ。今日、模擬戦で下した相手に。

ラファールはその辺の壁に、腹いせの蹴りをくらわせた。

たまたまそれを目撃したゼストの拳骨が炸裂し、ラファールは更なる怒りを募らせたまま家路につくのだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9987v/>

鋼鉄のストライカー

2011年11月18日06時15分発行